

若者と地域を紡ぐコーディネート

地域の学びを活かした

コミュニティマネジメント



はじめに

地元に誇りを持ち、将来、地域で活躍したい人材の育成を目的として、全国の小中高校大学・専門学校等、年代や領域を問わず様々な教育機関において、足元の地域を学ぶ「地域学習」が盛んに行われるようになりました。その学習方法は様々ですが、簡単に整理すると次の2段階に分けられます。1段階目は「地域を知る」ための学習、2段階目はそれを発展形にした地域課題を題材に自らが解決策を考え実践する「課題解決型学習」です。これらの実施に際して、地域と学校が連携して取り組まれるケースも一般的になってきましたが、地域学習の展開において地域コミュニティの役割は特に重要です。地域学習の核心は人々が多様な生き方をしている状態や地域資源をあらゆる視点で観察や探求を重ね、感じたこと、経験したこと、考えたことを表現し他者と共感しあうところにあります。その土地で暮らし、普段から地域の様々な人々と接している生活者は子どもたちに多様な地域の姿を伝えられる人材として高い適性があるのです。

島根県中山間地域研究センターでは、2023年から地域コミュニティが地域学習に協力するにあたって地域住民がどのようなノウハウを持ち、どのような学習を提供すると子どもたちが地域に関心を抱くことができるかという問題意識を起点に、特定非営利活動ESUNEを共同研究パートナーに迎え「地域が育てる地域人材育成のためのコーディネート技術に関する研究」に取り組んできました。私たちはこのテーマにあるように、学校と地域、あるいは地域住民同士をつなぐコーディネートスキルは地域学習の成果を左右する重要な能力であると仮説を立て、複数のコーディネーター的役割を担う方々やそのもとで地域学習に取り組む若者へのインタビュー調査や全国各地の大学の協力を得て、アンケート調査等を行い、地域学習に取り組むことの意義やコーディネーターの役割と効果について探求を重ねてきました。

本書は、地域コミュニティ組織に関わる方々や住民のみなさんが、あらゆる人や資源をつなぐコーディネーターとなり若者たちの教育に携わってもらい、子どもたちが「地域は面白い」と感じる手助けをしてもらいたく、地域学習を経験した若者が考えていること、地域に期待していることを整理したものです。「地域の子どもを地域で育てる」重要性と期待は今後一層高まると思われます。地域コミュニティ組織に携わる方々、集落支援員や地域おこし協力隊のみなさんをはじめ、つなぐ役割を期待されている方々に読んでもらえると幸いです。

島根県中山間地域研究センター地域研究科

皆田 潔

特定非営利活動法人ESUNE
静岡大学サステナビリティセンター

天野 浩史

本書の目的

本書では、小中高校や大学、専門学校等の教育機関が授業の一環で地域について学ぶ学習形態を総称して地域学習という言葉を用います。

地域学習の中で最もポピュラーな手法として、学校を飛び出して地域の状態を調べたり、活動テーマを設定して実践するフィールドワークがあり、そこに地域住民や地域コミュニティ組織が協力し、児童や生徒、学生（以下、学習者という）の指導者を担うケースがあります。このような学校と地域が協働した学習形態は、学習者の記憶に残る優れた学習の質を提供している他、地域側にも学習者とのふれあいから、地域の価値の再発見やいきがい形成につながる等地域活力を高められる効果があります。

本書は、地域学習、特にフィールドワークの受け入れをきっかけとして、それを地域活力の向上に結び付け、学習者が地域のファン、関係人口になり、交流の活性化、定住人口の獲得につなげていただきたいという目的をもとに作成しています。

フィールドワークは数名のグループに分かれ、複数の指導者に分散して活動に取り組むケースが多く、地域を案内したり、教える指導者を複数名確保する場合も生じます。そこで重要になるのがコーディネーターです。学校との調整や指導者の確保等の対応には地域に詳しい公民館の職員や集落支援員など、地域のまとめ役を担っている方が適任と言えます。本書はこのようなコーディネーター役を担う方や学習者の指導を担う地域住民の方やこれから地域学習に協力したい方のために、地域にお住まいの方が教育機関が取り組むフィールドワークのねらいや実施形態について事例を交えて解説しています。教育機関からフィールドワークへの協力を求められた場合に、どのような心構えで学習者に向き合えばよいのか、地域学習を経験した学習者の考えなどをまとめているため、地域学習を受け入れるさいの参考にしてください。

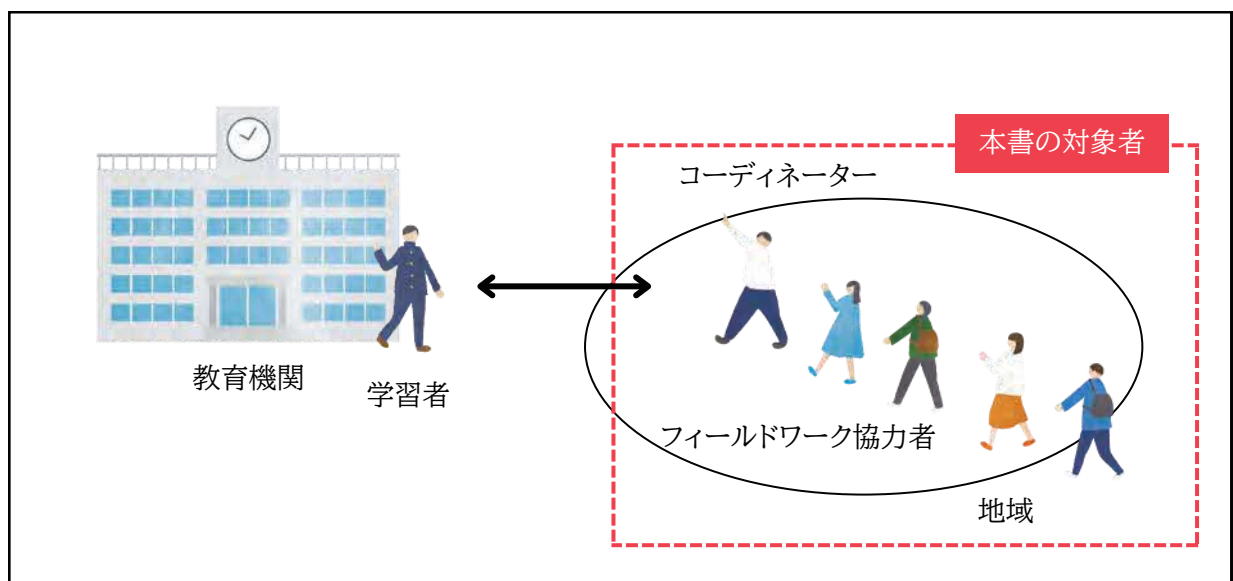


図0-1 本書の対象者のイメージ

目 次

第1章 地域づくりと教育機関を繋ぐコーディネーター

1 教育機関と地域づくりとの関わり	1
2 コーディネーターという地域の存在	3
3 地域と教育機関をつなぐ存在としてのコーディネーター	4

第2章 中学、高校で地域学習を経験した若者に身についた意識とは

1 地域を学ぶ意義	7
2 アンケートの概要と結果	8
3 地域学習の質とコーディネーターの関係	14

第3章 フィールドワークコーディネーターと学習者の関係 ー静岡大学地域創造学環のフィールドワーク科目を事例にー

1 大学における地域人材育成 ー静岡大学地域創造学環のフィールドワークの事例ー	19
2 地域と学生をつなぐコーディネーター 合同会社 so-an 代表社員 荒武優希氏（静岡県賀茂郡東伊豆町）	21
3 フィールドワーク経験者のその後の地域との関わり～インタビュー	23
4 コーディネーターと学習者の関わり	29

第4章 地域学習におけるコミュニティマネジメント

1 コミュニティマネジメントとは？	35
2 コミュニティマネジメントを活かした地域づくり	36
3 地域学習におけるコミュニティマネジメントの手法 ー「繋ぐ」から「紡ぐ」へ	37

おわりに	42
------------	----

第1章

地域づくりと教育機関を繋ぐ コーディネーター



第1章 地域づくりと教育機関を繋ぐコーディネーター

1 教育機関と地域づくりとの関わり

2009年に打ち出された「新しい公共」政策、2014年の第2次安倍内閣に立ち上がった「地方創生」政策により、NPOや民間企業等、地域住民や市民による地域づくり、社会課題解決が広がっていきました。また、2016年頃から日本国内にも広がった持続可能な開発目標(SDGs:Sustainable Development Goals)の達成に向けて、自治体、大手・中小企業等の行政セクター、ビジネスセクターにおいて、環境・社会・経済の持続性への向き合い方にも変化が現れています。近年では地方創生、持続可能な地域の実現を目的にした営利企業が生まれる等、日本の地域づくりにおいて多様な主体が新たな課題解決や価値創出を続けています。

多様な地域づくりの主体の中でも、古くから注目されるのが、小中学校、高校、大学等の教育機関です。

徒歩通学圏内に設置される小中学校では、1980年代に教育活動で「地域」という言葉が頻繁に使われるようになり、1990年代からふるさと教育の制度化が進められていきました(大友 2022)。ふるさと教育、郷土教育、社会科や総合的学習の一環として、自分たちが暮らす地域の歴史や資源を調査したり、解決すべき課題を検討し、提案する教育活動が展開されてきたことで、地域の中で、地域のことを学ぶ教育活動は裾野を広げていきました。第2章以降では、ふるさと教育等の地域教育によって、若者たちの地域志向の醸成についても紹介しています。

高校では、農業高校をはじめとした実業高校において、地域連携の取り組みは長い歴史があります。近年では、2023年施行の学習指導要領の改訂に伴う「総合的な探究の時間」、いわゆる探究学習の制度的実施により、実業高校に限らず普通科高校の生徒が地域社会で調査や活動する機会や新たな地域教育の施策が増大しています。また、ICTやDXという流れもあり、高校での探究活動をサポートする支援も拡充されてきました。例えば、島根県教育委員会では、高校生のキャリア形成サポート活動「あなたの背中そっと押しますプロジェクト(通称:おしプロ)」を立ち上げ、県立高校に通う生徒なら誰でも、どこからでも自身の端末からメタバース(仮想)空間上で講座を聴講したり、サポーター大学生が県外から地元の高校生を支援する等、高校生の地域活動や探究的な学びをサポートする仕組みが生まれています(図1-1)。

◎イベント情報◎
3月のおしプロ講座

 おしプロアイデア募集会議！ 開催日時：3/7(金)17:00～18:00 場所：オンライン	 戦争について すこーしだけ考えてみよう 開催日時：3/19(水)17:00～18:00 場所：オンライン	 自分の“思考”をすこーしだけ 覗いてみよう 開催日時：3/24(月)17:00～18:00 場所：オンライン
 民主主義・選挙を ボードゲームで体感しよう！ 開催日時：3/25(火)13:00～16:00 集合場所：松江駅	 「障がいて何？」から考える インクルーシブ教育 開催日時：3/28(金)10:00～15:00 場所：島根県立大学松江キャンパス	 こんなことも学ぶんだあ\ (◕◕) / 「栄養学」体験プログラム 開催日時：3/27(木)10:00～15:00 場所：島根県立大学出雲キャンパス

図1-1 島根県教育委員会「あなたの背中そっと押しますプロジェクト」おしプロ講座
(おしプロホームページより転載)

具体的な高校における探究学習の事例も見てみましょう。

広島県北広島町にある県立加計高校芸北分校では、総合的な探究の時間を「みのり学習」と称し、地域づくりに取り組むNPOや企業、地域住民と協働した学習が行われています。例えば、高校が立地する芸北地域は豪雪地帯に指定される高冷地で、昔からりんごが盛んに栽培され、校内の実習圃場でも数多くの品種が栽培されています。生徒たちは芸北地域のりんごをもっと広めたいという学習課題を設定し、町内の飲食店と協働でりんごを原料に用いたドレッシングを開発し、1年間で累計1000本以上買い求められる人気商品になりました。そして、このドレッシングは広島女学院大学と共同研究に発展し、塩分量や1日の野菜の摂取量等、健康面にも配慮した料理レシピの開発が行われています。また、別の生徒は広島市に本社を置く全国規模の製パン会社と協働で芸北りんごを使った菓子パンの開発に挑戦したり、りんごの木を剪定する際に生じる大量の剪定枝に着目し、森林組合と協働で燻製チップの開発に取り組んでいます。生徒それぞれが地元のりんごに関心を持ち、徹底的に活用し足もとの地域の特産品に育てようという強い意欲が伝わってきます。

また、専門職養成の教育機関でも地域学習は行われています。島根県益田市の県立石見高等看護学院では、「地域・在宅看護論Ⅰ（地域を知ろう）」の科目において、1年生の学生が3、4人のグループに分かれて益田市内の各地で行われている10か所程度の高齢者サロンを訪問するフィールドワークを行います（図1-2）。ここでは、生活状態や健康に関するヒアリング調査の他、高齢者の身体能力や安全性に十分配慮した看護学生ならではの視点でゲーム等を企画し高齢者と一緒に楽しみます。参加者は「こんなに笑ったのは久しぶり」、「必ずまた来てほしい」と話し、たくさんのお楽しみと笑顔を提供しています。

また、このフィールドワークにおける高齢者サロンのマッチングには益田市社会福祉協議会が大きく貢献しています。高齢者サロンの世話人の方と日程調整や学生が訪問する際の時間配分等の協議が綿密に行われ、学生とサロンの参加者の両者に恩恵が得られる影の功労者となっています。

学生たちは、地域の様々な主体の協力を得ながら高齢者とふれあい、住み慣れた地域でいきいきと暮らす人々の様子を肌で実感し、「地域のささえあいの大切さ」や「健康」の意義について理解を深めています。



図1-2 サロン参加者と談笑する看護学生

大学では、2005年1月に政府が設置する中央教育審議会の答申において、研究や教育に加えて「社会貢献」が大学の使命として言及され、地域社会との連携が重要視されるようになりました。各大学において社会貢献の実績が問われるようになり、地域・社会連携を進める部門・組織の設立に繋がっています。2013年には、文部科学省の「地（知）の拠点整備（COC:Center of Community）事業」が始まり、各大学では地域との連携による大学を活用した地域社会の課題解決や教育改革が始まりました。その後、2015年にはCOCに「地方創生」を加えた「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」、2020年にはその発展として「大学による地方創生人材教育プログラム構築事業（COC+R）」が展開されています。こういった政策の背景には、自治体をはじめとした地域側からの大学に対する期待があり、一部の調査では、地域側から大学に対してサポーター／パートナーとしての期待が寄せられていることも指摘されています（阿部 2008）。

政策は社会のニーズを踏まえて形成・展開されるため、教育機関における地域づくりとの関わりは、複合的な課題を抱える地域社会から教育機関への大きな期待の表れとも言えられます。一方で、教育機関の資源、特に人的資源には限りがあります。大学においては、教員が地域の現場への引率や事業の実施に時間を取られ、本来すべき研究活動の時間が割かれる不安な声や(中塚・小田切 2016: 6)、小中学校・高校においては、教員の多忙化という社会問題への対応と働き方改革によって、地域の期待に応えたくとも応えられないという声も存在します。

2 コーディネーターという地域の存在

多様な地域づくりの主体の出現は、同時に複合的で複雑な課題の解決が志向される中で、既存の主体では応えきれない課題が存在することを意味しています。こういった中で、近年注目されるのは、既存の主体同士を繋げたり、共創による化学反応を引き起こしていく「コーディネーター」と呼ばれる存在です。地域コーディネーター、コミュニティコーディネーター、学校コーディネーター等、あらゆる呼び名がつけられていますが、一般的には地域や各種教育機関、複数の主体の間に立ちながら状況を把握して、企画立案を行い、関係者への働きかけや調整を推進する役割を指します。

国内ではどのようなコーディネーターが地域づくりを担っているのでしょうか。

地域コーディネーターの相互交流・協働の全国コミュニティ「チャレコミ(チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト)」の事務局を担うNPO法人ETIC.では、地域で新しいことを始めたい若者と地域の事業者や行政等と繋ぎ、地域で新たなチャレンジを生み出すことを担う存在として、コーディネーターを明記しています。チャレコミに参画する各団体は、地域のコーディネーターとして、中小企業の経営や事業課題から期間を設定したプロジェクトをつくり、全国からチャレンジしたい若者を募集し、プロジェクトの伴走支援を行う長期実践型インターンシップに取り組んだり、震災等の大規模災害時に全国からコーディネーターが現地に入り、行政や社会福祉協議会の支援から抜け落ちてしまったニーズを汲み上げ、企業支援やボランティアとマッチングして復興支援に取り組んでいます。

そして、より専門性を高めた職業として、一般社団法人RCFが「社会事業コーディネーター」という名称で専門性や業務プロセスを定義しています。RCFは、2011年の東日本大震災をきっかけに、災害復興支援チームとして設立され、現在は災害復興に限らず地方創生や社会課題解決に関わる事業を、国や企業と協働しながら進めています。それを担うスタッフを「社会事業コーディネーター」として定義し、課題の現場で多様なステークホルダーと連携しながらビジョンを描き、関係者の調整をしながら課題解決を推進していく役割を担う存在として明文化しています。

また、多様な市民の参画を促すボランティア活動を企画したり、繋げたりする存在として「ボランティアコーディネーター」も、地域で重要な役割を担っています。全国に存在する社会福祉協議会、市民活動センターといった中間的な組織等で、地域のNPOとボランティア活動に取り組みたいという人を繋いでいます。加えて、ボランティアコーディネーター向けの全国集会・研修や「ボランティアコーディネーション力検定」を進めるNPO法人日本ボランティアコーディネーター協会によって、全国で市民参画を促すコーディネーター育成の基盤強化も進められています。

これらの事例に共通するのは、「間」、「中間」、「隙間」といった既存の組織や枠組みでは十分活かしきれないニーズや課題解決を補うことに加え、そこから新たな社会のビジョンを構想し、実現するための仕組みを具現化する役割がコーディネーターのあり方です。新たな社会像、仕組み、価値の創出を、地域の主体や資源を編集しながら実現する社会性と創造性を持った存在がコーディネーターだといえます。

3 地域と教育機関をつなぐ存在としてのコーディネーター

人的資源の限界が指摘される教育機関においても、コーディネーターを委嘱・採用するケースが増えています。小中学校では、2017年の社会教育基本法改正に伴い、子どもたちの学びや成長を支え、地域と学校が連携・協働して地域づくりを進めていく「地域学校協働活動推進員」を教育委員会が委嘱する枠組みが整備され、各地域・学校の実情に合わせた推進員（コーディネーター）の配置が促されています。大学では、社会貢献が使命となり、地域連携・協働を志向する事業の立案により、コーディネーターの役割を担う教職員の配置が進んでいます。

例えば、私たちは2017年度から2020年度まで、静岡大学にて、地域でのフィールドワークやプロジェクト型学習（PBL:Project-Based Learning）のコーディネートを担当する教職員として在籍していました。皆田は、地域創造学環のフィールドワーク科目の担当教員として、静岡県下の都市農山漁村のバラエティに富んだ学生の学びの地となるフィールドを地元の活動主体と協働で造成し、学生が安全に、かつ積極的に学習に取り組める基盤を整備してきました。また、フィールドワークの受け入れ側と教員が定期的に意見交換を行う場の設定や教員間でフィールドワークの方法や学びの質の向上を目的とした研究会（FD:Faculty Development）の設計や運営を行った経験があります。

天野は、全学共通教育科目の一つである「地域連携プロジェクト型セミナー」にて、企業の事業課題をプロジェクト化し履修学生が取り組むプロジェクト型学習のコーディネーターを担当していました。毎年4～5件の企業の課題解決のプロジェクト化や、学生募集、伴走、クロージング等、多岐に渡るニーズ把握、企画立案、調整等を担う役割です。地域づくり等の地域における価値創出、人材育成やプログラムデザインに関する知見といった専門性が求められることもあり、教育機関の中にいながら、企業の事業課題の解決と学生の成長、そして地域における価値創出を進めてきました。

また、同時期には大正大学地域創生学部地域創生学科の専門科目となる「地域実習」の現地受け入れ主体として、静岡県藤枝市における長期滞在型のフィールドワークのデザインに関わってきました。教育機関の外側から地域と大学を繋ぐコーディネーターという立場で、藤枝市の地域課題解決を大学生と共に取り組んできました。

私たちのように、教育機関の中にいながら地域を繋ぐ役割を担うというのは珍しいケースですが、コーディネーターのポジションは多様に存在しています。固定的な組織の枠組みにとらわれず、地域の実情や連携する教育機関の専門性や状況に応じて、柔軟な立場をとることができる（名乗ることができる）身軽さは、地域づくりと教育機関を繋ぐコーディネーターの良さだといえます。また、教育機関と地域づくりの関係は、「教育に地域資源を活用する」という状況になりがちであり、「教育のため」という目的に地域資源や地域づくり人材が動員・消費されるという実態もあります。持続可能な地域が求められている時代の中で、教育機会を地域資源と捉えて、学習者の自立・成長と地域の持続可能な発展を両立していくための技術・方法論が、この状況を打破するためには必要であるという想いが、本研究プロジェクトの根底にはあります。そして、両者の共創的な発展は、全国の地方都市・集落で共通の課題となっているUターン・Iターンの促進や若者の定着にも結びつくのではないか、という仮説が、研究プロジェクトの中で浮かび上がってきました。

本書では、地域に関する学習の経験と若者の地域志向に関する調査、地域と教育機関の間に立ちながら地域づくりに取り組むコーディネーターと地域に関わる若者の事例、コーディネーターとしての仕事づくりとキャリアデザインといったテーマの論考、実践方法の紹介をもとに、教育機関・若者・地域づくりを繋ぐ実践を進めていくためのポイントを考えていきます。

参考文献

- 大友秀明, 2022, 「戦後日本の教育における地域学習論の系譜」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』18, p9-16
- 中塚雅也・小田切徳美, 2016, 「大学地域連携の実態と課題」『農村計画学会誌』35(1), p6-11
- 阿部耕也, 2008, 「大学と地域との連携に関する要因分析の試みー大学と地域との連携によるまちづくり調査から」『生涯学習教育研究』静岡大学生涯学習推進センター, 10, p3-20
- 静岡県教育委員会, 2024, 探QラボShizuoka, (2024年12月20日閲覧)
<https://www.tanq-shizuoka.jp>
- 文部科学省, 2024, 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)ホームページ, (2024年12月18日閲覧)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/
- 文部科学省, 2024, 大学による地方創生人材教育プログラム構築事業(COC+R)ホームページ, (2024年12月18日閲覧)
https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/chihososei/index.html
- NPO法人ETIC., 2024, 「チャレコミって何?」, チャレコミ CHALLENGE COMMUNITY, (2024年12月20日閲覧)
<https://challenge-community.jp/about/>
- 一般社団法人RCF, 2024, 一般社団法人RCFホームページ, (2024年12月20日閲覧)
<https://rcf311.com/about/>
- 島根県教育委員会, 2024, おしプロ(高大連携推進員)ホームページ, (2025年3月4日閲覧)
<https://sites.google.com/ict.shimanet.ed.jp/oshipro/HOME>

キーワードの解説

新しい公共

従来、行政が行なっていた公共サービスについて、地域住民やNPO、企業等と協働しながら提供していくという考え方。2009年、当時の首相鳩山由紀夫氏が就任後の所信表明演説において言及し、2010年には『新しい公共』宣言』が出され、以降、地域住民やNPO等の活躍の場が広がる契機となりました。

ふるさと教育

地域の教育資源(ひと・もの・こと)をいかした教育活動(島根県教育委員会による定義)

キャリア形成

学生時代の経験や仕事を通じたスキル等を蓄積し、自身の自己実現を図るプロセス。

チャレンジ・コミュニティ・プロジェクト

NPO法人ETIC.が立ち上げ、若者と企業、自治体、大学をつなぎ合わせ、地域経済の新たな担い手を輩出することを目的としたプロジェクト。全国で約48団体(2025年3月5日時点)が参画しながら、各地域でコーディネーターとして活動しています。

インターンシップ(インターン)

学生が企業やNPO等で就業体験や課題解決を行うプログラム。一般的な企業の新卒採用を目的としたインターンシップでは、5日間程度のものが多いですが、地域づくりにおいては、半年間や1年間等の長期間のプログラムが展開され、休学して地域に滞在しながら地域活性化、コミュニティの問題解決、地場産業の価値創出等に取り組む学生も大勢存在します。

プロジェクト型学習(PBL:Project-Based Learning)

実践的な教育手法の一つで、学習者が具体的な課題解決策(プロジェクト)を設定し、実践を重ねながら学習を行う手法。近年、高校や大学では、プロジェクト型学習の機会が拡充し、企業、NPO、自治会の課題を題材にしたPBLが行われています。

第2章

中学、高校で地域学習を経験した若者に身についた意識とは



第2章 中学、高校で地域学習を経験した若者に 身についての意識とは

1 地域を学ぶ意義

近年、高校生や大学生が地域と連携した産品開発の取り組みや、地域の課題解決を目的として実践や提案を行う様子を新聞やニュースで度々見かけようになりました。地域が教育の教材として貢献している理由はいくつかありますが、大きく二つの背景が影響していると考えられます。ひとつは人口減少への対応です。減少傾向は今後も続く予想され、都市部に若者が流出する動きは避けられないとしても、地元のことを知り、地元への愛着が自身の心に育まれれば、将来地元での活躍を志向したい意識が芽生えたり、若いうちは他出[浩天1]しても、いずれはUターンを想定した人生設計をイメージする人も現れる可能性は十分考えられます。その地元志向の意識を形成するために、学校を飛び出して、住民の方々と接しながら地域を観察し地元詳しくなることは大変有効であると言えます。

もうひとつは、人材育成の手法の変化です。情報化社会にある現代は膨大な情報に溢れ、あらゆる技術の進化は加速する一方にあります。現代人には、その情報や技術を主体的に選択し使いこなす能力が一層重要になっています。さらには、社会問題が複雑化する今日において、自ら考え行動する自己解決能力や多様な人々と協力できるチーム力、そして人[浩天2]やものをはじめとした様々な資源をつなげるコーディネート力等、従来の学習方法では身に付けることが難しかった力を養う必要があります。このような学力以外の生きる力を身に付けるには、実社会に自らを落とし込み、主体的かつ実践的に学ぶことが効果的であるという視点に基づいて地域学習が広まっているのです。

地域を題材にした学習の提起が最初に起きたのは戦後の復興期と言われていますが、経済成長において学力向上を優先したい社会の要請等により、なかなか定着しませんでした。それが再び地域に目を向ける視点と人材育成の必要性が謳われたのは、地方創生の潮流でした。2014年にまち・ひと・しごと創生法の施行を受けて、政府は教育再生実行会議を設置し、2015年の第6次提言で「教育がエンジンとなって『地方創生』を」という強いメッセージが示された後、全国の小学校から大学・専門学校において、教育と地域の連携や協働が模索され、学校教育のカリキュラムに地域に誇りや愛着を深める教育(地域志向教育)が盛り込まれるようになりました。

島根県では、それに先行して2005年から地域学習を積極的に進め、早い段階から全ての公立小学校と中学校の全学年、全学級でふるさと教育が展開されました。島根県のふるさと教育は「地域の自然、歴史、文化、伝統行事、産業といった教育資源(「ひと・もの・こと」)をいかし、学校・家庭・地域が一体となって、ふるさとに誇りを持ち心豊かでたくましい子どもを育むこと」とあり、子どもたちの育成に関わる大人(地域)の育成もその対象に含め、「ふるさとへの理解促進」と「地域を支える次世代の育成」により、地域づくりの担い手として活躍する姿を目指しています。このような狙いの設定に基づいて、地域全体ですべての人がふるさとへの愛着を育む基盤が生まれ、持続的で質の高い人材育成が展開されています。その証左として、2023年に島根県が県内の中山間地域を対象に実施した地域実態調査の結果では、小中高校を対象としたふるさと教育の受入を行っている地区は県内の公民館区251地区のうち、94%にあたる236地区であることが分かりました(図2-1)。その内容は農業や地場産業の体験学習やまちあるき、学習の場の提供、親子、あるいは高齢者との異世代交流をテーマにした行事の企画運営、子どもたちに対して住民ボランティアが勉強を支援する学習支援等多岐にわたっています。

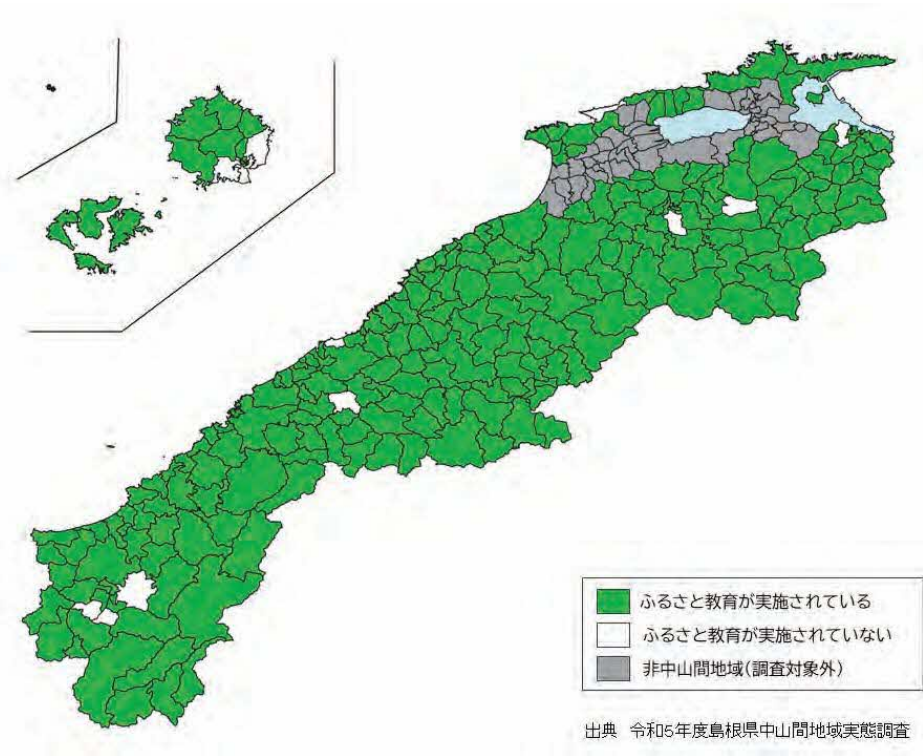


図2-1 島根県内のふるさと教育の協力受入状況

島根県のふるさと教育がスタートし、20年が経過しようとしています。ふるさと教育を経験した県内の若者の地域志向意識はどのくらいあるのか、他県と違いがあるのか、私たち共同研究チームはこのような問題意識を持ち、2023年に国内10大学に協力を求め、531人から回答を得ました(ウェブ調査)。本章ではその結果を使って、地域への愛着度の地域差や地域活動に関心がある若者が地域に求めていることを紹介していきます。

2 アンケートの概要と結果

このアンケート調査は、中学・高校期における地域学習の経験が地域づくりへの関心にどのくらい影響しているか把握するために実施しました。調査対象年齢は概ね40歳代以下としています。回答者531人のうち大学・専門学校生は83.9%、高校生は14.0%、社会人・その他は2.1%でした。回答は、東京、神奈川、静岡、島根、広島、愛媛、福岡の大学や高校の教員に協力を求め、授業等に回答時間を確保してもらいサンプルを収集しました(図2-2)。

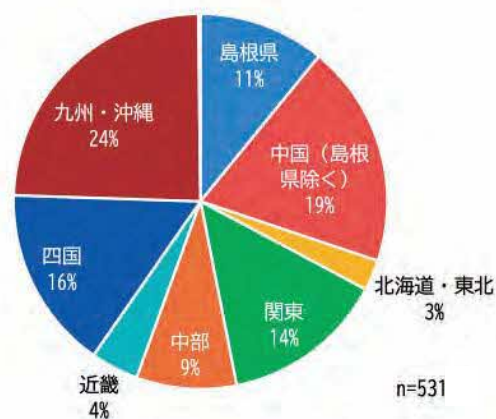


図2-2 回答者の出身地割合

(1)若者がイメージするふるさととは

最初に、若者が地域という空間をどのように認識しているか見ていきましょう。

図2-3は「ふるさと」という漠然とした言葉の捉え方を出身地域別に集計したものです。いずれの地域で最も多かった回答が「出身地や育った場所」と答えています。

特に、島根県ではその割合が81%に達しています。冒頭に記した県を挙げて取り組んできた「ふるさと教育」の効果と言えるでしょう。そして、島根県を除く中国地方においては73.5%、九州・沖縄地方74.4%、四国地方67.9%の順に高く、西日本で高くなっていることが分かります。一方で関東や関西では、この割合が低く、「出身地や育った場所やそれ以外の場所」の割合が高くなり、「ふるさとと思う場所はない」と答えた比率も他地域よりも一定数高くなっていました。都市部出身と地方出身の若者とは「ふるさと」のイメージに差が生じている背景が読み取れたところで、次からは地域学習の実態とその効果について確認してみたいと思います。

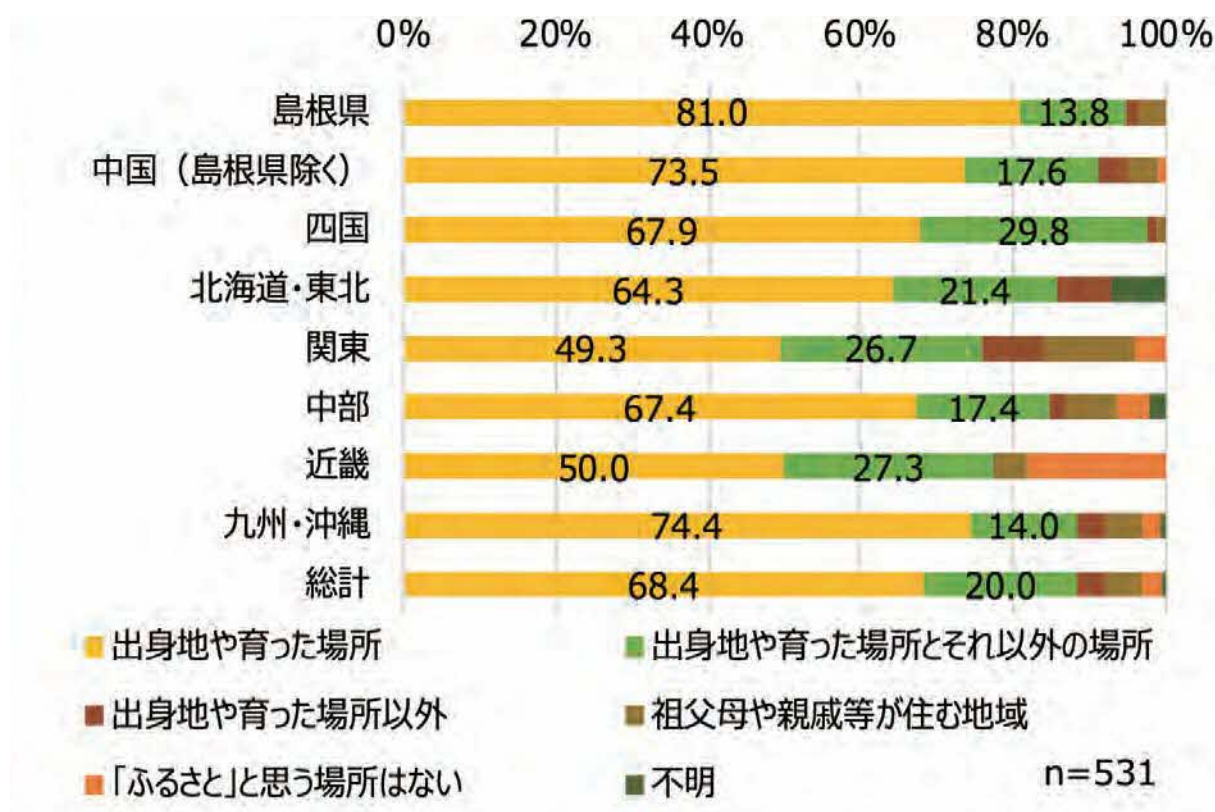


図2-3 ふるさとをイメージする場所(出身地域別)

(2)年代別にみる地域学習の経験

図2-4は、中学、高校の授業における地域学習の経験の有無について尋ねた問いの結果です。

中学では「授業を受けた」と答えた人は、30代で28.6%、40歳以上は25%ですが、20代は56.8%、10代では70.6%と非常に高くなっています。一方、高校では、30代以上では授業を受けた人は全くいませんが20代は39.1%、10代では59.9%が地域学習を受けたと回答しています。冒頭で述べたように、育成すべき人材像の変化に伴い、育成手法が変化していったことが分かります。近年の地域づくりの現場では大人が子どもたちとの接点を模索する取り組みが増えてきましたが、30歳以上の人は、高校において地域学習がどのように行われているか、ほとんどの人が詳しく知らない状態にあると考えられ、子どもや若者が学校で地域についてどんなことを学んでいるのか、大人が理解を深めることで子どもの地域への関心が一層高まると言えるでしょう。

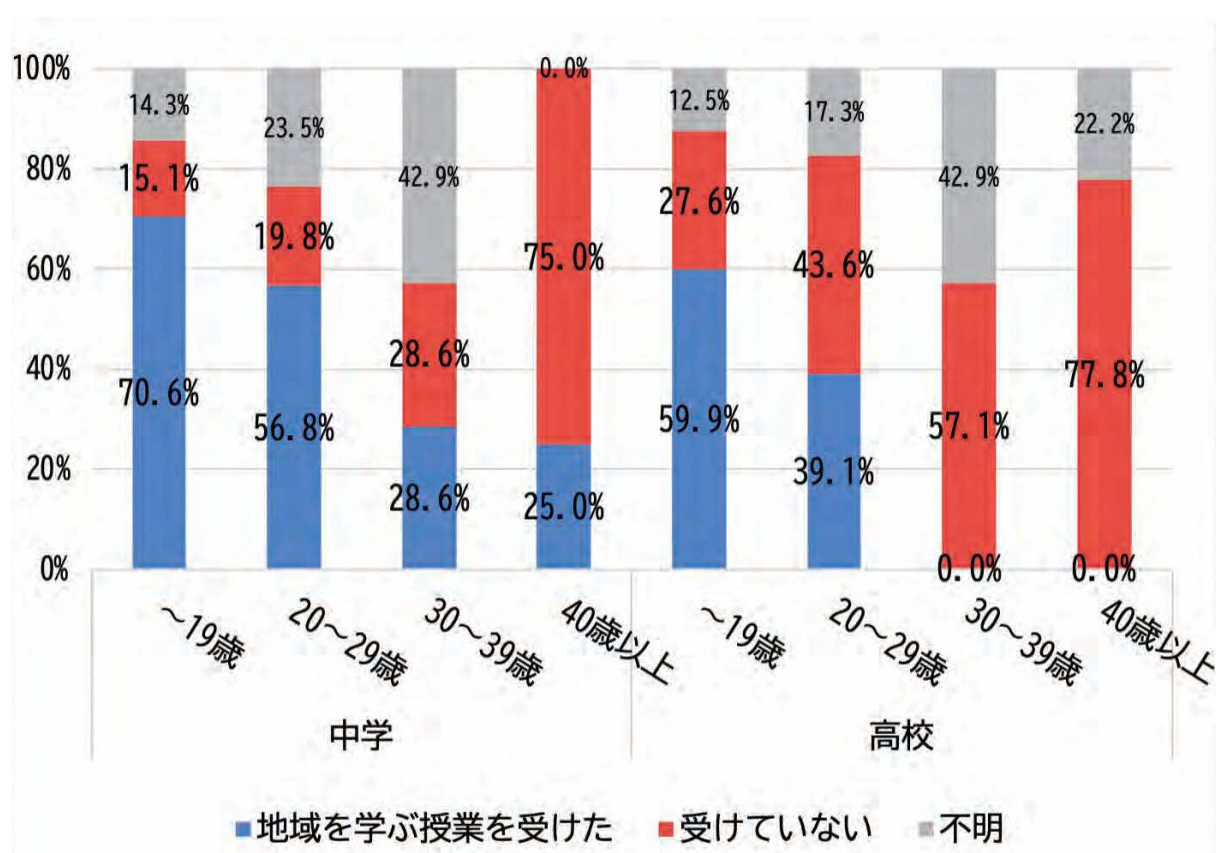


図2-4 地域学習の経験の有無(年代別)

(3)地域別にみる地域学習の経験

図2-5は、地域学習の経験の有無を地域別に示したものです。これをみると中学では全回答者の62.9%が「地域学習を経験した」と答えていますが、これを上回る地域は島根県、島根県を除く中国、四国、中部地方でした。特に中四国地方は高い水準で地域学習が行われている状態が分かります。

高校では、総計が48.6%で中学と比較すると14.3%低下しました。特に中部地方は中学では、69.6%であったのが高校では19.6%にまで大きく低下し、中学と高校の地域学習の実施に対する方針の差が見られます。これに対して島根県は高校でも79.3%が経験したと答え、次いで島根県を除く中国地方62.7%、四国地方66.7%でこの3地域が総計を上回る結果になりました。この結果から、高校では特に地域学習の実施において地域ごとのバラつきがあることが分かりました。

地域学習の経験者が少ない地域の学校や教育委員会へのヒアリング調査から、「地域学習に取り組みたくても実施できない」事情が見えてきました。その理由として、地域学習の指導者、協力者がいない、教科の授業を優先したい等の声が聞かれましたが、最も大きな理由は「地域とのつながりが無い」でした。学校の教員は人事異動にて配属された地域外の教員が多く、地元との接点は決して多くはありません。地域学習は住民の方との対話や地域資源への着目、様々な主体との協働等、幅広いネットワークが必要とされます。つまり、地域学習の経験者が多い地域は、学校と地域の関係が構築できている地域であると言え、特に、それぞれの学校に地域と連携を図るコーディネーターが配属されている特徴がありました。

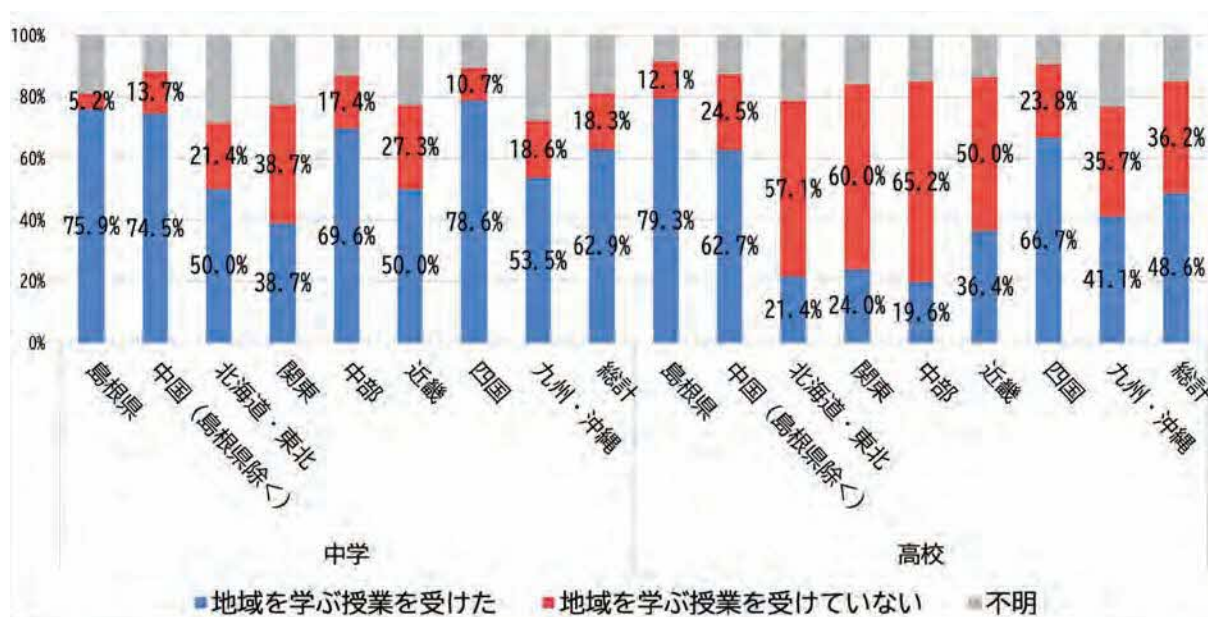


図2-5 地域学習の経験の有無(地域別)

(4) 中学と高校の地域学習の内容

地域学習の方法は、多岐にわたり地元企業の見学や農業体験等、地元の産業を学ぶ受動的手法、自らの足で地域を調べるまちあるきや地域資源調査等の調べ学習、そして、これらの体験をもとに、自らが課題を設定し、実践することで様々な気づきと経験を得る課題解決型学習があります。みなさんのなかにも児童生徒、学生らがグループでメモ帳やカメラを片手に地域を歩いている様子を見かけた人やインタビューを受けた方もいるのではないのでしょうか。知らない人に声をかけ、質問することは子どもや若者にとっては勇気のいることですが、物怖じしない力や情報を聞き取る力を身に付けるトレーニングも兼ねているのです。このように学校の外に飛び出して主体的に取り組む学習は単に課題解決という目的の達成や知識の獲得にとどまらず、「生きる力」を体得することができているのです。このような校外での学習は学校関係者のみでは成立しにくく、実施には地域の協力が不可欠で、公民館や役所が学校と地域の間に入り、事前に自治会等に周知や協力を求める下準備が行われています。最近では、地域学習を支援する中間支援組織の活躍も目覚ましく、第3章に登場する静岡県の団体はその一例で、外から学びに訪れた学習者の育成にコーディネーターとして携わり、地域への定着を実現させている優れた成果を残しています。

ここからは、地域学習で何を行っているのか、中学と高校を例に述べていきます。

図2-6はアンケート回答者が中学と高校で実践した地域学習の内容を多い順にランキング化したものです。中学で取り組まれる最も多い学習は、まちあるきと地図づくり(52.1%)、次いで地域に詳しい人に話を聞く(49.1%)でした。以下、地元企業へのインターンシップや農業体験(30.2%)、地域のまつり等のイベントに参加した(27.2%)と続きます。その実態をみると、中学では「地域を知る」ための学習に重点が置かれている傾向が見受けられました。

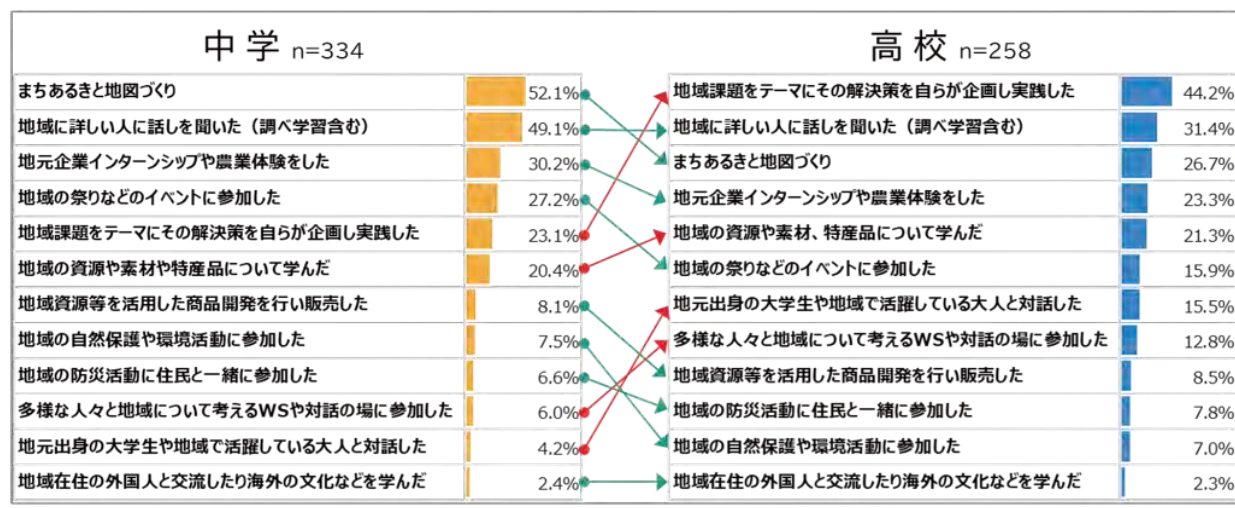


図2-6 中学と高校の地域学習内容

次に高校では、中学の「地域を知る」学習からの高度化が見られます。最も多くの人を経験した学習は地域課題をテーマに解決策を自らが企画し実践した(44.2%)でした。中学での経験者の割合が23.1%であるため高校では倍近くになっています。この学習は、地域の状態を詳細に把握するリサーチ力が問われ、それが不十分だと実践途中で頓挫するケースも少なくありません。上手に取り組んでいる生徒の様子を観察すると地域の実践者やその道に長けた人への取材を丁寧に行っていたり、また、こうした人達のノウハウや技術を借りて、時には厳しい指摘を受けながら大人社会の中で学習の域を超えた活動に取り組んでいました。またこのような生徒は、学習成果もさることながら、一連の経験が自身を一回りも二回りも成長させ、学力とは異なる社会性を身につけていました。

他にも、中学の実践割合と比較して高校で増加した学習内容では、地元出身の大学生や地域で活躍する大人と対話(15.5%)、多様な人々と地域について考えるワークショップや対話の場に参加した(12.8%)となり、高校においては他者との対話や交流が増加する実態が確認できました。

(5)地域学習の効果

地域への愛着の度合いを地域学習の経験の有無で比較した結果が図2-7です。これを見ると地域への愛着は学習経験に関係なく9割の人が愛着を感じていることが分かりました。差が確認できたのは愛着の強度です。中学の時に学習経験がある人は、愛着が「とてもある」と答えた人が50%(学習経験がない人は43.3%)で高校においては、愛着が「とてもある」と答えた人は56.6%で、学習経験がない人では39.8%と差が確認できました。回答者は、高校のみで地域学習を経験した人や中学、高校の両方で経験を積み重ねた人が混在し、経験の量を考慮する必要がありますが、地域学習は地域への愛着を獲得するのに有効であると言えます。

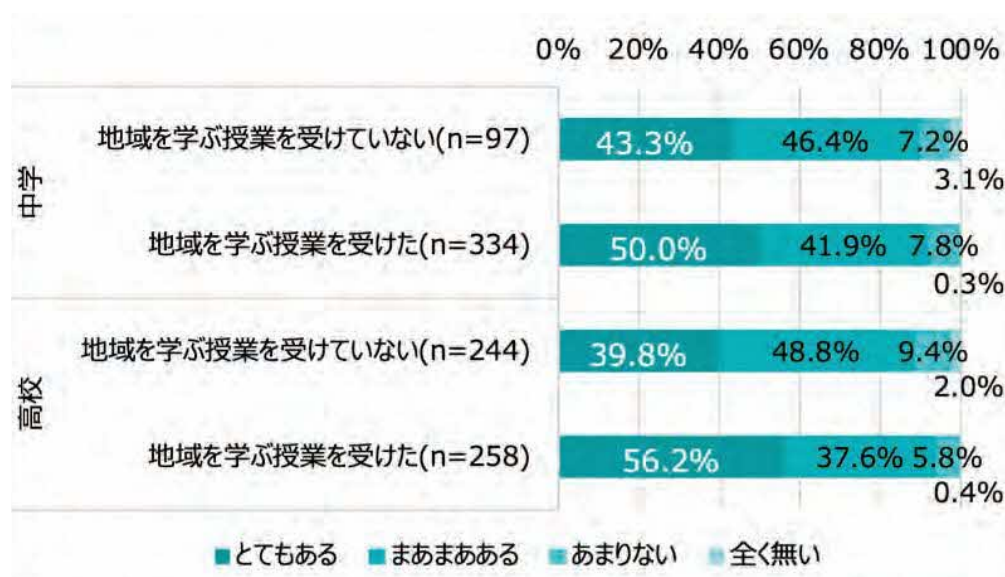


図2-7 地域学習の経験の有無と地域への関心の違い

(6)若者が参加したい地域の条件

図2-8は、地域学習の経験の有無を問わず、「地域づくりという活動に興味がありますか」という質問に対し「とても興味がある」、「少し興味がある」と答えた423人に、「地域づくりに参加する際に地域に求める条件」について質問した結果を示したものです。



図2-8 若者が参加したい地域の条件(複数回答)

最も多かった回答は237人が選択した「同世代が参加している」でした。新たに参画しようとする際、同世代が既に活動している状態は、大きな要因になることは予想できる結果でした。意外だったのは2番目以降の「地域の課題解決に貢献する実感が得られる」175人、「将来自分がなりたい姿に近い人がいる」122人、「活動主体が活動目的を明確に持っている」110人、「自己実現につながる活動がある」97人でした。この結果から、地域づくりに興味を持っている若者の多くは自らが社会に貢献したい意欲を持っており、活動への参加が自身の成長や自己有用感の獲得に結びつく活動を求めているように感じられます。さらには、「活動主体が活動目的を明確に持っている」、「役所や役場と連携がある」(81人)の回答の背景には、地域に認められ地域に根ざした活動を展開している公共性の高い主体の中で活躍したい想いが感じ取れます。

これらの若者のニーズは、地域で若者が活躍する受け皿を整えていく上で大変貴重なヒントになります。現在では、まちづくり協議会等、地域コミュニティに地域を代表する住民組織が数多く立ち上がり、行政の伴走支援を受け取りながら活動に取り組むケースも一般化してきており、若者が安心して関わりやすい状況にはなっていると思われます。一方で、若者の意思や貢献欲を高める仕組みづくりのノウハウは、多くの主体が持ち合わせていない部分であり、若者を受け入れるにあたっての技術や手法の習熟が今後の課題と言えるでしょう。

3 地域学習の質とコーディネーターの関係

アンケート調査の結果を総合的にみると、地域学習の経験の有無と「ふるさと」という言葉へのイメージとは関連していることが分かりました。そして、地域学習は若い年代ほどその経験があり、地域活動への参加は現代の中学、高校、大学生の自己の成長の手段として一定のニーズを確認できました。また、中学、高校の地域学習の内容の違いから学校や地域によって、実践内容にばらつきがあることが見えてきました。考えられる要因は、地域学習を展開するフィールドの学習環境はまちまちで、各学校で利用可能な学習資源を探し授業を設計している実態があると思われます。これが地域学習を体系化することが難しいとされる所以です。しかし、地域ぐるみで地域学習をサポートする母体があれば、様々な学習資源を手に入れることができ、結果として地域学習の質の充実に繋がります。

そして、この地域学習の充実には学校と地域をつなぐ公的機関や中間支援組織の存在は大変大きく、アンケート調査で十分に明らかにできていませんが、地域学習を経験した人が多い地域では、学校と地域をつなぐ仕組みが整っていると推察できます。

近年は、地域学習を専門的に担当するコーディネーターが学校側あるいは行政側に配置される事例は一般的になりつつあり、地域と学校の連携は以前に比べれば実現しやすくなっていると感じますが、地域学習の実践がコーディネーター任せになっている事例も僅かですが確認されました。大切なことは学校が地域学習で育成すべき人材像を示し、コーディネーターや地域の協力者はそれに適した学習資源を繋ぎ合わせ、両者が協働で授業を設計することによって、子どもたちの地域への理解は一層高まると考えられます。

さらに別の視点では、コーディネーターや協力者は一連の学習を地域の取り組みとして外部に発信する役割を担ってもらいたいです。情報発信に積極的な地域では、地元の中学校高校に限らず、大学等の他地域の教育機関からの学習フィールドの提供の依頼や相談があるケースも見られ、地域全体の交流人口の拡大につながった言わば地域学習を地域づくりに活かした事例があります。この地域では、その後、地元の高校と複数の大学が定期的に学習交流を行うようになり、将来なりたい姿を明確に持つ高校生が増加し、それは進学率にも影響したそうです。つまり、地域学習の受け入れが地域全体のプラスになるという戦略を持つことは重要と言えるでしょう。

最後に地域学習が住民の意識を変えた象徴的なエピソードを紹介します。100人規模の小中学生の受け入れが毎年幾度かある地域では、複数の家庭がそれぞれ数名ずつ受け持っており、子どもたちに生活体験をさせていました。受け入れ家庭から事務局に度々寄せられる意見の大半は「季節や天候によっては、受け入れても体験させることがない」、というものでした。そこで、コーディネーターは、それぞれの家庭がどのような体験をさせているかアンケート調査を行い、その結果をすべての受け入れ家庭に共有したのです。集まった体験メニューは103種類に上り、それらを共有すると「これならうちでもできる」、「雨天時でも心配がなくなった」という声が聞かれるようになりました。また、受け入れ家庭同士が一堂に会して話し合う勉強会等を企画し、地域全体の受け入れスキル＝学習の質も上がっていったのです。

このような機会を重ねると、受け入れる家庭は、自分の家の周りを観察し始めました。そして身の回りの素材を学習資源として認識し、いままでなかった体験を自ら考案する家庭も現れ始めたのです。メニュー豊富な地域学習は子どもたちに大変喜ばれ、「自分の町でこんなことができるとは思わなかった」、「なんでもできるすごい人に出会った」等感想が聞かれました。子どもたちに「自分の住んでいる町の良さ」を伝える地域学習の本来の目的を達成したのです。

そして、受け入れに携わる高齢者の一人は、「この歳になって子どもたちの教育に関われて嬉しい」と話しました。受け入れ側が足元を「調べる」、「お互いが学びあう」行動は、住民自身が地域の良さを認識するようになり、その良さを子どもたちに伝えて喜ばれる循環が受け入れ側に新たないきがいをもたらしたのです。子どもたちの地域学習を契機に大人が地域に着目するようになったこの事例は、島根県のふるさと教育が目指す、学校(子ども)と地域(大人)双方の郷土愛獲得のための方法を端的に表していると感じます。地域づくりの現場で度々聞かれる「住民の協力が広がらない」という課題の一因には「地域を良くするために」という漠然とした働きかけではイメージが湧かず、共感が得られる目的や目標に対する道筋が描きにくく、他者への広がりを得るのは難しいからだと考えます。「子どものため」のように対象が明確になれば、様々な具体的な手段が見つかっていく、これは地域づくり全般に言える活動の秘訣と言えるでしょう。

本章では、若者の中学校高校での地域学習の経験や彼らが地域に期待する受け入れ条件について説明してきましたが、次章では、大学生の地域学習の様子やそこから得た郷土愛について見ていきます。

参考文献

- 教育再生実行会議, 「「学び続ける」社会、全員参加型社会、地方創生を実現する教育の在り方について(第六次提言)」, (2024年11月18日閲覧)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afielddfile/2015/04/15/1356851_3_2_1_1.pdf, 2015,
- 島根県教育委員会, 「ふるさと教育基本方針」, (2024年11月18日閲覧)
<https://eio-shimane.jp/files/original/2024111209143309218d83e9e.pdf>
- 島根県教育委員会, 「ふるさと教育の運用の見直しについて」(2024年11月18日閲覧)
https://www.pref.shimane.lg.jp/education/kyoiku/iinkai/message/index.data/soumu_iinnkai_siryou_hurusato.pdf

キーワードの解説

まち・ひと・しごと創生法

人口減少や地方の活性化に対応するための基本的な枠組みを定めた法律。人口減少や東京一極集中の問題を是正し、地方における持続可能な地域社会の形成を促進することを目的としています。

地域志向教育

地域の文化や歴史、自然、産業、暮らし、地域づくり等の社会的な要素を題材に、これらの課題解決や発展を目指す実践的な学びを提供する教育を指します。これにより、地元への愛着を向上させ、Uターン意識を高める狙いがあります。

課題解決型学習

学習者が現実の課題や問題を自ら発見し、それを解決する過程を通じて知識やスキルを身につける学習方法です。従来の「知識を受け取る学習」ではなく、主体的・探究的な学びを重視します。

中間支援組織

市民、NPO、企業、行政等の様々な主体の間に立ち、それらをつなぎ支援する組織のことです。地域づくりの場面においては資金・情報・人材・ネットワークの提供等を行い地域課題の解決につながる支援活動を行います。

まちづくり協議会

地域で活動する多様な団体や個々の住民で構成し、主体的に課題解決等のまちづくりを行う地域を代表する団体です。

第3章

フィールドワークコーディネーターと 学習者の関係

－ 静岡大学地域創造学環のフィールドワーク
科目を事例に －



第3章 フィールドワークコーディネーターと学習者の関係

－ 静岡大学地域創造学環のフィールドワーク科目を事例に －

前章では中学、高校で繰り広げられている地域学習の実施状況や学習効果を見てきましたが、本章は大学における地域学習に焦点を当てます。学生時代にフィールドワークを経験した学生が卒業後も地域と関わり続け、地域の一員として活躍する若者の例を取り上げ、その動機や彼らが地域で取り組んでいる活動を紹介し、そして、その関わりづくりに貢献した地域と大学を結ぶコーディネーターの存在に注目し、学習者と長期的な関係を築き、持続的な関係を維持した事例を紹介します。

本章は次の4部で構成しています。

1. 大学における地域人材育成 ～静岡大学地域創造学環のフィールドワークの事例～
2. 地域と学生をつなぐコーディネーター 静岡県東伊豆町（so-an代表 荒武 優希）
3. **インタビュー** 大学のフィールドワークでの経験と卒業後の地域との関わり
 - ・移住し、デザインで地域の魅力を発信するAさんの例（静岡県東伊豆町地域おこし協力隊）
 - ・副業で地域づくりをサポートするBさんの例（会社員）
4. コーディネーターと学習者の関わり

1 大学における地域人材育成 ～静岡大学地域創造学環のフィールドワークの事例～

地域づくり人材の養成教育を目的に2016年に誕生した静岡大学地域創造学環は地域と大学が連携した地域づくりの実践例を数多く創出してきました。本項は筆者が関与した2016年から2020年までのフィールドワーク科目の設計とその効果について振り返り、学生がどのような仕組みで地域学習に取り組んでいたか、紹介したいと思います。

地域創造学環は1年生後期から3年生後期までの2年半を同じ地域で学ぶフィールドワーク科目を柱に据えていました。学内で行われる通常の授業もフィールドワークの実践活動を見据え、社会調査の手法や地域づくりの理論や変遷を総論的に学ぶ授業の他、それぞれのコースでは地域づくりに役立つ専門的な科目で構成されたカリキュラムになっていました。また、行政や民間企業、NPOをはじめとする市民団体等の実践者をゲスト講師に招く授業も数多く企画され、学生は地域で起きている課題や解決方法やそもそも地域とはなにか、について当事者から直接学びを得る地域に根ざした人材になるための知見を高める授業が展開されてきました。

フィールドワークの実践方法にも地域づくりの即戦力を育成する狙いが見受けられます。それは、①コースを跨いだチームを編成し、異分野が結束して取り組む、②縦の繋がりを重視し1年次から3年次をひとつのチームとする、③単年度に区切ることなく、地域と中長期的に関わり、信頼関係を醸成する、そして、④地域の実情と課題に正面から向き合うため、フィールドワークの事前・事後学習の機会を定期的に確保し振り返りや次の作戦を練る時間に充てられました。地域創造学環のコースは当初①地域経営、②地域共生、③地域環境・防災、④アート&マネジメント、⑤スポーツプロモーションの5コース（2020年から①②③を統合し地域サステナビリティコースに再編）で構成され、フィールドワークの実施方法の検討段階では各コースの専門性を発揮するため、各コース単位で実施する方法も検討されていました。しかし、地域課題とは押し並べて様々な原因が絡み合い、単独の分野では解決し難い事象がほとんどです。また、他者を尊重し多様な力を集結させて課題解決に臨む協働こそ地域を学ぶ学生が身につけるべきスキルと考え、コースを跨いだチーム編成による実施方法に切り替え、さらに上級生が下級生に向けてフィールドの情報や活動を伝えたり、結束を高めるチームワーク力を身につける狙いから一つのフィールドに1年生から3年生が混在する「地域と中長期的に関わり、信頼関係を醸成する」理念を体現する仕組みでの運用を決断しスタートさせました（図3-1）。

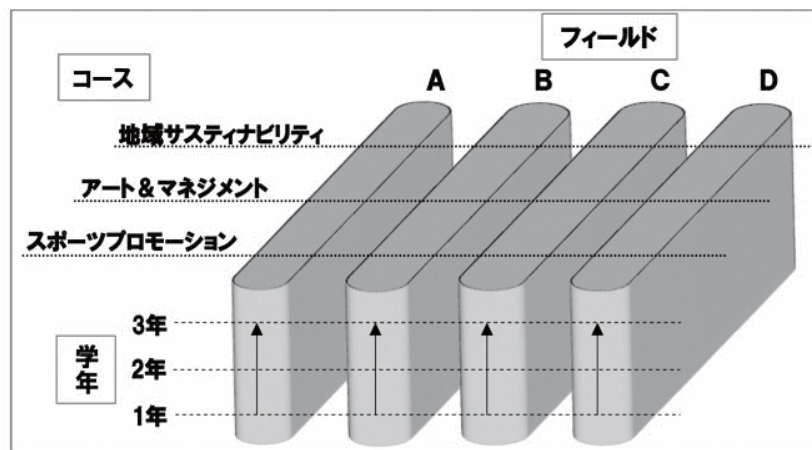


図3-1 静岡大学地域創造学環のフィールドワークの考え方

そして、1年生のフィールドの配属は自らの選択に責任を持って活動に取り組む狙いから、できる限りで本人が希望するフィールドを選択できるようにしました。結果的にこの狙いは功を奏し、フィールドの課題に対して取り組んだ結果、学生自身の達成感が数多く認められ、それは、新たに加わる1年生へのアピールはもちろん、学外に向けた成果報告に現れていました。また、3年生になると、フィールドワークから感じた問題意識をベースに卒業研究のテーマ設定をする学生も少なくなく、自らの経験から論じられる卒業論文は読み応えのあるものが少なくありませんでした。

実践的な地域づくりを経験するフィールドワークの展開には、地域の受け入れ主体の協力が不可欠でした。しかし、当時は静岡大学に限らず、地域学習としてのフィールドワークに取り組む大学では学生の人材育成に関するノウハウの蓄積は多くなく、大学が求める人材育成像を地域に求めてしまいがちで地域と温度差が生じるケースも少なからずありました。地域創造学環では受け入れ主体、コーディネーター、教員が会しフィールドワークの問題点を明らかにし、長期にわたり良好な関係を維持するための協議の場を設ける等、地域と共にフィールドワークを育んできました。このような場合は、フィールド全体の学びの質の向上に貢献し、各地域の特性を生かしたオリジナリティ溢れる活動の展開につながったのでした(図3-2)。



図3-2 地元自治会と連携したビーチクリーン活動に取り組む学生ら

2019年時点では静岡県内14地域16テーマでフィールドワークが繰り広げられ、都市地域、農村地域、沿岸地域様々な条件のフィールドで学生たちは様々な経験を重ねました。しかし、その後のコロナ禍においては活動が中止され、学生が地域を訪問できない時期もありましたが、可能な方法で地域との繋がり維持に努めたと言います。地域と協力して考案した様々な計画の実現が困難になった学生の心境は筆舌に尽くし難いものがありました。そして、コロナ禍を脱した以降、フィールドワーク活動が再開できたのは、受け入れ側の理解と協力を尽きます。また、再び受け入れる決断を促したのはそれまでの学生と地域のみなさんとの関係が良好であったからに違いないと言えるでしょう。しかし、残念ながら2024年度をもって、地域創造学環のフィールドワークはグローバル共創科学部への統合により一旦仕切り直すことが決まりました。

一部のフィールドにおいては長期的な関係構築を目指すとしてきた設立当初の理念が果たせなかったことは残念ですが、フィールドワークを通じて学生が地域の方々と紡いだ関係や様々な挑戦の経験はこれからの人生の糧になるに違いないでしょう。

次節は、卒業後に働く場としてフィールドを選択したり、都市部で働きながら地域活動を支援する二人の若者の事例を用い、若者が地域に還流した動機や経緯について紹介します。また、二人が共通して還流の動機に挙げた大学と地域をつなぐコーディネーターの存在についても触れていきます。

2

地域と学生をつなぐコーディネーター

合同会社so-an代表社員 荒武優希氏(静岡県賀茂郡東伊豆町)

地域創造学環のフィールドワークを活かして地域に大きな変化を生み出しているのが、静岡県東伊豆町稲取(いなとり)地区を中心に事業を行う合同会社so-an(以下:so-an)です。本節では、so-anの代表社員であり、地域創造学環のフィールドワークを受け入れ、コーディネーターとして関わっている荒武優希さんの実践から、コーディネーターと学習者の関係、そして地域づくりとの関係を考えてみましょう。

東伊豆町は、静岡県の伊豆半島の東側に位置する観光を中心とした第3次産業と漁業・農業を主要産業とする自治体です。昭和60年度国勢調査の人口17,033人をピークに人口減少が進み、令和2年度の国勢調査では、人口11,488人となっています。こういった状況から、東伊豆町は2016年4月に初めての地域おこし協力隊を採用。第一号の協力隊となったのが、荒武さんでした。



荒武 優希 さん 33歳

合同会社so-an 代表社員

1991年生まれ、神奈川県横浜市出身。芝浦工業大学大学院在学中に東伊豆町稲取地区にて空き家再生活動を始める。2016年に東伊豆町地域おこし協力隊として稲取に移住し、同年NPO法人ローカルデザインネットワークを設立。2020年に合同会社so-anを設立し、宿泊施設の運営や地域活性化事業に取り組む。

荒武さんは、芝浦工業大学の大学院時代に、友人らと「空き家改修プロジェクト」を立ち上げ、縁あって東伊豆町の空き家を改修する機会を得ました。しかし、改修した空き家は結局誰にも使ってもらえず、それが大きな原体験となり、2軒目に改修の機会を得た消防団の元倉庫の案件は地域のコミュニティスペースとするコンセプトで設計し、リノベーションを行いました。その建物が東伊豆町消防団第六分団器具倉庫であったことから「ダイロクキッチン」と名付けました。卒業を控えた荒武さんは、リノベーションした拠点を活かして、自らもまちのプレイヤーとして、まちの人たちと使っていこうという想いが高まり、大学院を修了した2016年の春に地域おこし協力隊として東伊豆町に移住しました。

協力隊として着任した年には、空き家改修プロジェクトに関わってきた仲間と、東伊豆町の活性化を考えるNPO法人ローカルデザインネットワークを設立し、協力隊とNPOの立場で地域づくりに取り組みました。同時期に、静岡大学からフィールドワーク先として受け入れの打診があり、2017年より荒武さんがフィールドコーディネーター、NPO法人ローカルデザインネットワークが実施協力団体となった地域創造学環の「東伊豆町フィールドワーク」がスタートしました。

少しだけ、東伊豆町フィールドワークについてご紹介しましょう。

東伊豆町のフィールドワークは、「新しい観光スタイルの発掘・創出」というテーマを掲げ、2017年度のフィールドワークでは、学生たちが中心となって企画するフォトコンテストを開催、2018年度は東伊豆町商工会が主催するイベント「難フェス」の企画検討・実施を行うなど、イベントをきっかけとした地域住民や観光客との交流に重きを置いたプログラムに携わってきました。この時期のフィールドワークでの学生との関わりについて、荒武さんは「仲間のようだった」と回顧されています。



図3-3 東伊豆町フィールドワークの様子(INATORI QUEST)

2017年度から2019年度のフィールドワークの方針は、東伊豆町稲取地区を好きな人を増やし、交流拡大に主眼が置かれていましたが、2020年度からは地域内の住民や地域づくりに携わる人々との連携・交流の深化に着目した活動へとシフトしていきました。高校生や他大学と連携した取り組みや、アートという視点からの地域づくりへのアプローチなど、より多面的な地域づくりが加速しました(図3-3)。

同時に、荒武さん自身も地域のキーパーソンとしての道を歩み始めます。2018年には社会起業家育成スクールである「東海若手起業塾」での学びを経て、2020年に合同会社so-anを設立し、空き物件をリノベーションし、宿泊施設の経営に乗り出しました。荒武さんは、この事業は単なる宿泊業ではなく、地域全体を一つの宿に見立て、宿泊拠点と地域の各拠点を結び、滞在価値と地域活性化を図る建築家ならではの視点で「まちやど構想」を打ち立て、そのコンセプトに基づいて空き家を活用した複数の宿泊施設を運営しています。地域おこし協力隊隊員、NPOの理事、そして地域事業の経営者として、東伊豆町の地域づくりに必要な視点が生まれる過程で、荒武さん自身も担う立場や役割が変わっていきました。

さて、地域創造学環のフィールドワークにより、一年間を通じて大学生がまちに関わり続ける東伊豆町ですが、興味深いのは、フィールドワークで活動した卒業生が、時々宿に泊まりに来たり、中には地域おこし協力隊として着任したり、会社員をしながら副業でso-anの仕事に関わるなど、有機的な関係が継続していることでした。私たちは事例研究を進める中で、これは偶発的なことではなく、フィールドワークにおける地域学習の学び、そしてコーディネーターである荒武さんの関わり方が影響しているのではないかという仮説が浮かび上がってきました。

次節からは、フィールドワーク経験者で今もなお東伊豆町と関わりを持つ2名の方と、荒武さんの関わり方について検討していきます。

3 フィールドワーク経験者のその後の地域との関わり～インタビュー

1) 大学卒業後、社会人を経て学生時代のフィールドワークに取り組んだ地域に移住した若者

Aさん(26歳女性)

1998年生まれ 北海道旭川市出身

デザイナーを目指し静岡大学地域創造学環アート&マネジメントコースに進学。在学中、フィールドワーク科目において3年間、東伊豆町に通い、地域住民と協働でイベントの企画運営等に携わる。大学卒業後、東京の広告代理店に就職しマーケティングや営業職を経験するも自らがデザインの創作に携わりたい希望から退職。現在、東伊豆町地域おこし協力隊とデザインの個人事業のマルチワークで同町のプロモーション活動を中心に観光客や移住者の誘致に取り組んでいる。

聞き手:大学の地域に関係する授業やフィールドワークについては最初どのような印象を持っていたのでしょうか?

Aさん:正直にいうと、私はデザインに関心があったので、地域に関する授業は義務教育みたいな感じで受けていたんです。もちろん、学んでいるからには単位取っておきたいし、学ぼうとは思いつつも、デザインの授業よりは全然力は入ってなかったんです。

卒業する時にフィールドワークの引率の先生にメンバーの中で1番地域に興味なさそうだったよねって言われたくらいですから。

聞き手:初めて東伊豆町を訪れたときはどう思いましたか?

Aさん:今まで暮らしてきたまちの中で一番田舎だなって感じました。でもまち歩き等でいろんな場面に触れていくと、少しずつ地域の魅力に気付いてきたんです。東伊豆町の人々の温もりをすごく感じたのを今でもはっきりと覚えています。軒先からおばあちゃんが話しかけてきて、私達は静岡市から来た静大生です、みたいなことを話していたら、

干し柿あげるよって。その軒先に吊るしてあった干し柿をくれたんです。

私の出身の北海道旭川市にはそんなに田舎がないのと静岡市も栄えているので、全く知らない、初めましての人とこんなコミュニケーションが取れる場所があるんだみたいな。いい意味で衝撃でした。

聞き手:コーディネーターの荒武さんは、当時のAさんからみて、どういう存在でしたか?

Aさん:若いのにすごくなって思っていました。私達がやりたいことやらせてくれて、どっしり構えて見守ってくれていたんです。

荒武さんの存在がなかったら、私はいま東伊豆町にいないなっていつも思います。

聞き手:そのフィールドワークではどんなことに取り組んだのですか?

Aさん:まずはまち歩きから始めて、その後、賑わいづくりに力を入れました。

最初は、荒武さんのコミュニティに私たちも入り込ませていただいて、住民の方と共同作業したり、役場の方々とお話しさせてもらったりとか、人や町、地域全体を知るところから取り組みました。翌年には下級生が加わり、私たちはイベントをやりたいメンバーだったので、イベントの企画立案や運営をやらせてもらいました。フォトコンテストや東伊豆町の民芸品のつるし雛や空き家を題材にしたイベントをいくつかやりました(図3-4)。



図3-4 学生と地元の小学生から高校生が共同で作成した東伊豆町の魅力を詰め込んだウォールアート

何故イベントをやりたいかということ、私たちが最初に東伊豆町を訪れたときに感じた魅力は、実際にこの町に来ないとわからない魅力だなんて自身が気付いたのが大きかったです。私たちもフィールドワークの事前学習で東伊豆町のことを沢山調べましたが、実際に足を運んでみると、それを上回る発見や体験がありました。だから私たちがどれだけ調べて資料を作ったとしても伝えきれないと感じて、集客イベントが一番この町の魅力を伝えられるんじゃないかと思って取り組みました。

聞き手:Aさんたち学生と荒武さんの関わり方はどんな感じだったんですか？

Aさん:1年生のフィールドワークでは学生のメンバーは私を含めて4人しかいなかったのが活動は荒武さんと肩を組んで並走してもらっていた感じでした。外の視点を大事にしてくれたのが印象に残っています。下級生が増えて、人数がまとまってきたタイミングで荒武さんは、一歩下がって私達の活動を見守ってくれる感じに変わっていったんです。

前のミーティングでは、どういう風に企画を進めたいか、決まったことを荒武さんと共有しておいて助言をいただいて、私達自身でフィールドワークに臨む形が多かったです。色々な活動を通じて、地域の人にたくさん出会って、地域に詳しくなっていくと、地域のことが好きになっていったんです。

聞き手:Aさんは、時間をかけて東伊豆町を好きになっていったんですね。その間にAさんの学生生活や自身の考え方が変化したなと思うところとかってありますか？

Aさん:私の大学生活はデザイン中心に進んでいましたが、デザインって机上で完結してしまうところがあるんです。それをアウトプットさせる場として東伊豆町があったのは大きかったです。フィールドワークで企画するイベントのチラシとか、集客の様子でその出来がわかるんですよ。

在学中も卒業してからも荒武さんからデザイナーとして相談してくれたのは認めてもらえたようで嬉しかったです。

自分がやりたいデザインっていうのをアウトプットして、生の声が返ってくる場。それが東伊豆町でした。

そういう意味では、東伊豆町のおかげで、客観的に自分のデザインを振り返ることができるようになりました。

聞き手:卒業後、東伊豆町との関わりはあったのですか？

Aさん:同期と、毎年みんなで東伊豆町に旅行に行きたいねって話していて、定期的に訪れる場所にはなるだろうなっていうのは思っていましたし、実際に、東京の広告代理店に就職してからも毎月のように東伊豆町を訪れていました。でもそのときはこの町に住むとまでは考えていませんでした。大学に進学するときに両親にはいつか北海道に帰る前提で出してもらったところがありましたから。

卒業後に就職した東京の会社を辞めようと思っていた頃は北海道に戻って母が経営するデザイン事務所に入るつもりだったんです。そのタイミングで荒武さんから協力隊の声をかけてもらって、チャレンジしたいと思うようになりました。

最近、改めて両親と話したら、両親は北海道での仕事にこだわっていないことが分かって、それなら、逆にこっちに出てきちゃえと思って誘っています。

もう北海道ではなくて、むしろ今の私のライフスタイルは静岡、伊豆に関わり続けたいなって思っています。自分でもびっくりですね。その変化には。

聞き手：その頃のAさんの心境をもう少し詳しく聞かせてください。卒業後、東伊豆町から離れた形で、東京で働きながらも度々旅行で訪れるなかで、東伊豆町に対する思いとかってというのは、さらに向上していった感じですか？

Aさん：さらに向上してきましたね。東京は自分に合わなかったんですよ。私があんなに憧れてやっと行けたのに、全然合わなくて。だから、度々東伊豆町に行ってリフレッシュして、また頑張ろう！みたいな感じでした。

聞き手：荒武さん以外にも移住を後押しした存在はいらっしゃいましたか？

Aさん：移住者の方の存在も大きかったです。荒武さんご自身が10年くらい前に移住したときに作ったシェアキッチンに東伊豆町に移住してきた若い方が集まるようになって、会社員時代も、東伊豆町を訪れてはその方たちと色々な話をしました。

移住者、町外の方問わず若い人と集まって会話ができる、そういうあったかいコミュニティがあるっていうのが嬉しくて。東京で寂しかったのがあるかもしれないですね。

聞き手：東京での生活のことを教えてもらえますか？

Aさん：寂しかったですね。人はいっぱいいるけど、人の温もりを感じる、コミュニケーションが取れる人って私の周りにはいないなって思っちゃって。自宅に居ても親しいご近所さんはいないし、会社の人たちも仕事仲間って感じだし。そういうコミュニティがないのがすごく寂しくて。東伊豆町に来たら、荒武さんをはじめ、みんなが居て温かい楽しい時間を過ごせると感じていました。移住したらもっとそういう仲間が増えるだろうなってイメージが膨らんできて、人の温もりを求めて移住を決心しました。

聞き手：Aさんが東伊豆町を訪れて希望を与えてくれた方々は、どんなお仕事をされている人たちですか？

Aさん：東京の企業に勤めている人もいますし、私の協力隊の先輩に当たる方もいます。協力隊の任期終了後にそのまま移住した若い方も大勢います。協力隊の働き方はこういう感じなんだったって、荒武さんも含めて見てきてすごくイメージができました。

協力隊でデザイナーもできるっていうのも、魅力ではあったんですが、荒武さんがいなかったり、顔なじみの人がいない状況だったら私は踏ん切りがついてなかったはずですよ。

聞き手：ありがとうございました。Aさんが学生時代に東伊豆町で取り組んできたこと、その後の移住までの過程や心境の変化がよくわかりました。Aさんのデザインをみました。デザインの風合いがローカルを大事にしている感じというか、東伊豆への想いが感じるデザインだなんて、純粹に感じました。

Aさん：嬉しいです。やっぱり東伊豆町がすごく好きなんです。これからは稲取駅で魅力的なお土産が買えるようにしたいですし、パンフレットやイベントのチラシとか見ていると、もっといいアウトプットの仕方あったんじゃないかなって思うことがよくあるんです。そんな日々の気づきを実際にアップデートしていけたらいいなって思っています。

インタビューを終えて

Aさんのインタビューから、学生時代にフィールドワークをコーディネートした荒武さんが現在はビジネスパートナーに変わった関係性が見えてきました。Aさんのデザインセンスを見抜き、一人のデザイナーとして相談していた所作は若者を一人前に育てる技術でもあり、両者の信頼関係を一層厚くしたターニングポイントだったのではないのでしょうか。また卒業後に就いた都会での社会人時代にホスピタリティと戻れる空間によってAさんの心の拠り所をしっかりとついていたところも、移住につながったポイントと言えるでしょう。

2)大学卒業後もフィールドワークを経験したまちの地域づくりを副業でサポートする若者

Bさん(25歳男性)

1999年生まれ静岡県伊東市出身

静岡大学地域創造学環地域経営コース入学。Aさん同様、フィールドワーク科目において3年間、東伊豆町に通い、地域住民との関係を醸成。コロナ禍に大学を休学し、東伊豆町に移住し荒武さんが管理するコミュニティスペースでカフェを始める。現在は東京に本社を置く旅行会社のIT部門に勤めながら、副業として月1回の頻度で東伊豆町を訪れ、大学生のフィールドワークや、県内外の学生が取り組む賑わい創出プロジェクトのコーディネーターを担う他、荒武さんが経営する合同会社so-anの事業を手伝い、東伊豆町の地域づくりに尽力している。

聞き手:はじめに、大学進学時、地域づくりを学ぶ学部を志望されましたが、元々地域づくりに興味があったのでしょうか？

Bさん:地元の伊東市の観光産業がもっと盛り上がったらいいなと漠然と思ってましたが、でも、具体的にこうしたい、ああしたいという強い気持ちはなかったんですよ。

聞き手:授業のフィールドワークで東伊豆町を希望したのは、地元に近いという理由からですか？

Bさん:地元の伊豆地域に目を向けたいという気持ちはありました。それに、興味のある観光産業をメインテーマに活動しているのは東伊豆町のフィールドでしたから、活動の経験が地元の伊東市に還元できることがあるかなと思ってました。何より、先輩たちのフィールドワークに対する熱意が感じられて楽しそうだなって思ったんです。

聞き手:フィールドワーク最終年にあたる3年生の時、コロナでフィールドワークが全面中止になりましたよね。その時にはどんなことをしていましたか？

Bさん:おそらく1年間以上何もできない状態になったと思ったので、僕たち学生は東伊豆町との関係を見つめ直したいと思って、活動の振り返りに使いました。自分たちが引退した後、下の学年が動きやすい活動環境を残してあげたくて、現地に行かなくてもできる活動を考え、例えば東伊豆町に関わる他の大学との情報交換を企画したりしました。僕自身、その時にはフィールドワークという枠ではなく、東伊豆町のコミュニティに対しての愛着が芽生えていたんです。

コロナで現地に行けなくなって、現地と接点が無くなるのは避けたい気持ちが強く、現地に行けないなりの企画を後輩たち主導で進めてもらい、僕らはそれをサポートする形で、東伊豆町との関係を繋いでできました。

聞き手:コーディネーターの荒武さんを中心にしたフィールドワークの進め方について聞かせてください。荒武さんからミッションの提示があったのか、それとも自分たちで活動する中で、荒武さんと話し合って活動を決めていったのでしょうか？

Bさん:前者ですね。荒武さんが「この時期にこういうイベントやりたいから考えてみて」という感じでした。「その中身については任せるよ」みたいな。そこから僕たちは何をするか、どういう人を呼びたいかを考えて企画を仕上げていきました。このやり方は東伊豆町のフィールドワークから代々受け継がれていて、学生が請け負った課題だという意識でした。

聞き手:荒武さんが学生を信頼している様子がよくわかります。コロナ禍でも荒武さんや東伊豆町との関係が維持できたのは、学生が地域のためになにかできないか、という寄り添う想いからなんですね。ところで、Bさんは4年生の時に休学されたと聞きました。何をされていたのでしょうか？

Bさん:フィールドワークを引退する3年生の終わりのタイミングで大学を休学して、海外に行くつもりでしたがコロナで渡航ができなくなりました。荒武さんに相談をして、海外に行けるまで東伊豆町で過ごさせてもらいました。結果、卒業までいましたね。その間、簿記や調理師の資格を取得したりしました。

滞在中の大きな出来事は、東伊豆町の地産地消のコミュニティカフェを開く企画を作って、ビジネスコンテストに応募したんです。結果、採用はされませんでしたが、いろんな大人に相談したら、もう始めた方が早いんじゃない？と背中を押してもらって、荒武さんが運営しているダイロクキッチンを借りて始めました(図3-5)。メニューの材料はフィールドワークで知り合った東伊豆の様々な生産者の方が提供してくれたんです。復学後も東伊豆町に住み、1年1ヶ月の間、カフェの運営をしていました。卒論に取り組みながらでしたから大変でしたが、首都圏からワーケーションで来ている20代、30代の方と知り合いになって就職活動の相談をしたり、色々な知識を得ることができました。

聞き手:Bさんがカフェを開きたい意思を示したあと、場所や材料など東伊豆町のみなさんがBさんを全力で支えてくれた様子がよくわかりました。ところで、フィールドワークに入る前と後、Bさんの考え方や大学での学び方が変わった点がありますか？

Bさん:何故それをするのか、その意義は何か、深く考えるようになりましたね。それに、取り組むに際して自分がどういう役割を担うべきか、意識するようになったかな。



図3-5 第六消防団の器具倉庫をリノベーションしカフェを開いた「ダイロクキッチン」

移住する前と後で感じたのは、やっぱり住んでみないとわからないことがあるというか、フィールドワークだと、どこまでいってもよそ者でしかなかったんだと感じました。「静大の学生さん」って呼ばれていたのが住んでしばらくすると名前でも呼んでもらえるようになったんです。それに地域の方が学生にする話すと、学生が帰った後、僕にしてくれる話は内容の濃さが違うんです。自分がフィールドワークで来てた時は、こういう風に思われていたんだと受け入れる側になって気付きました。

聞き手:名前でも呼んでもらえたり、言いにくい意見でも話してもらえる様になったというのは地元の人と思ってもらえるようになったということかなと思います。

Bさん:学生と住民の間の人という感じかもしれないですけどね。

聞き手:フィールドワークで東伊豆町に愛着が湧き、休学中に起業したり、地域との関係が濃密になっていったBさんですが、今改めて、東伊豆町はBさんにとってはどういう場所なんですか。

Bさん:行く場所から帰る場所になった、ありきたりな表現ですけど第二のふるさと的な感じです。東伊豆町のみなさんが、僕が本業の仕事で町を出て行くとき「早く帰ってきてね」、「またいつ戻ってくるの?」って言ってもらえます。東伊豆役場の方は、冗談半分でしょうけど「いつでも席空いてるから」、「早く来なよ」と言ってくれて、そういうウェルカムなところがとても好きです。

聞き手:現在の様子を聞かせてください。首都圏に住みながら、副業で東伊豆町の地域づくりに携わっておられますが、Bさんが未だに関わり続ける理由はなんですか。

Bさん:理由はあまりなくて、僕がそうしたいからっていうだけかもしれない。仕事がなくとも行きますし。会いたい人が沢山いるので。特にお世話になっている農家の方は同じ目線で話をしてくれるというか。その方は年齢が僕の倍ぐらい離れてる方ですけど、お友達みたいな感じで、人生相談に乗ってもらうこともありました。その人に会いに行きたいと思うのも理由としては十分ありますね。同じようにまた会いたいと思う人は他にもたくさんいますよ。20人くらいは。

何があっても相談できる人がたくさんいるので、カフェを開くときはとても心強かったです。今もプライベートで最近どう？みたいに電話やLINEしてます。そうやって考えてみると東伊豆町は実家って感じですかね。

聞き手：Bさんと東伊豆町を繋いだ荒武さんですが、どんな人ですか？

Bさん：フィールドワークでお世話になっているときから、良き先輩という感じでしたが今、一緒に働くとうすごい人だなと思います。自分にないものを持っているというか、熱意というか、やると決めたことをやり抜く力はすごいと思います。

僕と東伊豆町を繋いでくれていたのが荒武さんでしたからすごく感謝しています。

聞き手：現在は荒武さんとどれくらいの頻度でどのようなコミュニケーションをとっていますか？

Bさん：荒武さんとは、大学等のフィールドワークの受け入れ時のコーディネーター業務の分担が多いです。荒武さんが忙しいのを知っているので最近、仕事の話しかしていません。必要最低限の情報を共有して、あとはお互いのこと分かっているでしょ。みたいな感じで、自分で仕事の段取りを考えて着手しています。

聞き手：信頼関係の深さが伝わってきます。荒武さんはきっとBさんはこう思っている、Bさんは荒武さんだったらこう考えるだろうなという阿吽の呼吸が垣間見られました。

Bさん：荒武さんとは18歳から接してきて、もう7年ぐらいになりますね。

聞き手：さて、これからどんなふうに東伊豆町に関わっていきたいですか？

Bさん：実は、いずれ再び東伊豆町に住もうという決心があるわけではないんです。今、東伊豆町は沢山の地域おこしの協力隊の方が居て、若い人も多くて、良いことなんだろうなと思うけど、あまり、その中の1人になるのは嫌だなと思っているところがあります。「東伊豆町が盛り上がっているから、戻ってきました」という感じに捉えられると、美味しいところに帰ってきたねみたいな風に思われるのも嫌で。

実際には思われないでしょうけど、自分が東伊豆町で明確なやりたいことが見つかって、自信を付けてから「戻る」という選択肢を加えたいですね。現在、東京に出ている理由は20歳代のうちに色々な経験積みたい、視野を広げたいと思ったからです。

今、本業の仕事で全国に出張に行って、例えば旅館街の実情などを知れて本当に勉強になっています。

移住してもいいかなと思える地域もありますが、ゆくゆくは、東伊豆町で過ごした時間が、東伊豆町への想いを強くしているのかなとは思っているので、将来住む地域は決まっていないういながらも、やっぱ東伊豆とか伊豆が自分の中では大きい存在といううか、場所になると思います。

インタビューを終えて

学生の時に取り組んだ東伊豆町でのフィールドワークがきっかけとなり、当初目指した休学の姿ではありませんでしたが、コーディネーターの荒武さんに相談し東伊豆町に居を構えたBさん。その後のカフェ起業や卒業後も地域に関わる要因は地域コミュニティの温かみと彼を見守り応援する様子にあることがわかりました。東伊豆町とBさんの関わりをみると現在の住まいが地域外であっても、年月をかけて築いた人々との信頼関係が彼を引き寄せているように感じました。

4 コーディネーターと学習者の関わり

ここからは、二人のインタビューに加えて、コーディネーターの荒武さんに実施したインタビューから、「コーディネーターが学習者とのように関わってきたのか」という視点で、コーディネーターの存在意義と学習者との関わりについて考えていきます。インタビューの分析から、「地域学習中の関わり方」、「地域学習以降の関わり方」という段階において、特徴的なコーディネーターの関わり方が見えてきました。

地域学習中の関わり方

「具体的にどのようなフィールドワークを設計・運営してきたのか?」、「その中で学習者とのようなコミュニケーションを取っているのか?」という視点から東伊豆町でのフィールドワークを整理してみると、3つのポイントが見えてきました。

Point 1

「教える／教えられる」という関係ではなく、 地域づくりのパートナーとして接する

荒武さんのインタビューでは、Aさんのような特にフィールドワーク受入れ初期のメンバーを「同志として」、「仲間として」という表現で表すことが何度ありました。伺ってみると

「自分たちも地域づくりのプレイヤーとして始まったばかり。その中で、教える／教えられるという関係ではなく、地域づくりのパートナーだという関係で接していた」

という想いを当時から持たれていたそうです。

これは、地域学習時のコミュニケーションの取り方にも表れています。例えば、フィールド地域における具体的な地域課題解決や地域資源活用を目的としたプロジェクト型学習(PBL)の場合、コーディネーターの関わり方は、取り組みをサポートしたり、話し合いをファシリテートしたり、提案等にアドバイスをしたりと、様々な役割があります(表3-1を参照)。

表3-1 PBLにおけるコーディネーターの関わり方

コーディネーターの関わり方	関わり方の具体的な内容
サポート	学習者が主体で進める取り組みを補助・支援する
ファシリテート	学習者が中心に進められるような働きかけをする
アドバイス	調査や提案に対して課題点や改善点を指摘する
コラボレーション	学習者が進める取り組みと自らの取り組みを掛け合わせる

荒武さんが、「地域づくりのパートナー」と仰っていたように、「一緒にプロジェクトを推進していこう」というスタンスとメッセージを学習者に対して伝えていたそうです。あえて表現するのであれば、「コラボレーション」と言えるかもしれません。すなわち、荒武さん自身が描く地域のビジョンを示しながら、学習者が本来持っている能力や特性を掛け合わせ、互いに協働しながら形にしていく、というコーディネーターの立ち位置が特徴的に表れています。見方を変えると、教育機会を活かしながら地域づくりを前進することともいえます。つつい地域側の立場で受け入れを行うと、「うちの地域にはこんな資源があるから教えてあげよう」、「学生たちが考えたビジネスプランにアドバイスをしよう」というような、教える／与えるというスタンスになりがちだからこそ、学習者をパートナーとして一緒に地域づくりをしよう、というメッセージを伝えることが重要なポイントになりそうです。

Point 2

安心してやってみたいと思う働きかけと、環境をつくる

東伊豆町におけるフィールドワークは、初期の頃から「新しい観光スタイルの発掘・創出」というテーマを設定し、基本的には学習者である学生たちの主体性を前提とした地域学習が展開されていました。この場合、「具体的に何をやるのか」で行き詰まったり、「本当にこのアイデアでいいのだろうか」と不安になったりする学生は少なくありません。

荒武さんは、基本的に「やってみなよ」と後押しをされるそうです。これはシンプルな言葉ですが、不安や曖昧さを抱く学生にとっては、グッと背中を押してもらい、一歩目を踏み出す勇気が湧き上がる言葉でもあります。

加えて、荒武さんは「やってみなよ」と伝えた後、適度な距離感で見守ったり、定期的に相談にのる等、基軸は委ねつつも学習者に伴走しているのです。学生のアイデアに対して荒武さんのネットワーク・人間関係を通じて、「この人に会おうと良い」と他者を紹介する際は、必ず間に一度入り、繋げた後も定期的に進捗を確認する等、学習者が主人公として地域で活動しながら、大きなコミュニケーショントラブルや事故が起きないよう緩やかなリスクマネジメントが行われています。

また、学生たちが行った企画に対する地域住民からの反響は、必ず学生たちにフィードバックされていることも重要な点です。「〇〇さんが▲▲と言っていたよ」という具体的なエピソードを伝える等、いわゆる、派遣元である大学が主催する報告会等ではなく、身近な生活の変化や企画の手応えを、地域住民のリアリティのある声を届けることで、より直接的な気付きに繋がっていると感じます。

地域学習を学生とともに続けることで、地域側からの眼差しの変化も見られたと言います。荒武さんに対して、「地域おこし協力隊として活動している荒武さん」、「空き家問題をなんとかしようとしている荒武さん」という荒武さんが東伊豆町で活動を開始した当初のイメージから、「大学生と一緒に何かをしている荒武さん」というイメージの変化が生まれ、「今、大学生たちは何をしているの?」、「今度はいつ来るの?」というコミュニケーションも生まれていったようで、大学生という存在がコーディネーターの荒武さんと地域側の間にいることで、地域で変化を生む触媒のような効果が発揮されているように思います。そして、このような地域の眼差しは、フィールドワーク中に何かあった時に助けてもらえる関係の創出にも結びついているとも言えます。

コーディネーターの働きかけに加え、地域学習を通じて生み出す地域住民との関係により、学習者が安心感を持ちながら地域で新たなチャレンジしやすい環境をつくるコーディネートが見えてきました。

Point 3

学習者と地域の主体をつなげていく／つながっていく

上述の通り、コーディネーター以外の地域との繋がりが生成されていくこと、すなわち、学習者と地域の主体が出会い、自律的に繋がっていくことを促すことで、新たな地域の価値の創出や学習者の変容が生まれやすくなっているのも、東伊豆町におけるフィールドワークの特徴の一つです。

例えば、(3)で紹介したBさんの、東伊豆町に滞在した2年間のエピソードからも、コーディネーターの荒武さん以外の東伊豆町の人々と生まれた関係性が、Bさん自身のやりたいことへのチャレンジや、「行く場所から帰る場所になった」という第二のふるさと感覚の形成に結びついています。

ちなみに、本研究の一環で行なった他地域におけるフィールドワーク経験者のインタビューでは、

「コーディネーターの人に会いにいきたいというよりも、お世話になった地域の方に会いたくて、長期休みに何度も遊びに行っている。」

というケースも確認でき、地域学習で出会った地域の事業者の方に可愛がってもらったことでより深い関係性が生まれ、コーディネーターを介さない継続的な関係へと発展しているようです。地域学習を通じて生まれる多様な繋がりの中で、学習者にとって最も心地よい繋がりや、本来の自分が受容される繋がりを育んでいくようなイメージを持った地域学習のデザインが重要となりそうです。

さて、ここまで地域学習における3つの関わり方のポイントをご紹介してきましたが、特に、コーディネーターの地域学習以降の学習者との関わり方が地域との持続的な関係に発展していることが確認できました。

地域学習以降の関わり方

改めて、Aさん、Bさんへのインタビューを振り返ってみると、大学の授業としてのフィールドワーク以降、東伊豆町への再訪問のみならず、より深く地域と関わる場合、学習者が持つスキルで貢献する姿が見えてきます。これが偶発的に生まれている部分もあれば、コーディネーターの荒武さんの存在も大きく影響しているとも言えます。

例えば、荒武さんは「学生時代からAさんのデザインスキルに惚れ込んでいた」と振り返られており、Aさんが大学卒業後もso-anのデザインの仕事を業務委託していました。また、Aさんが就職してからも頻繁にコミュニケーションを取り、勤務する会社の部署異動をきっかけにモチベーションが下がっていた際、地域おこし協力隊の募集があることを紹介しています。

また、Bさんの場合、実家の伊東市に帰省した際には、荒武さんの仕事を手伝う機会をつくったり、在学中のフィールドワークの授業とは別の機会に東伊豆町に滞在して活動する場を設ける等、継続的な関わり方をされています。

Aさん、Bさんに荒武さんの存在を伺うと、「良き先輩」、「どっしり構えて見守ってくれる」という印象を出会った当初から持っていたため、コミュニケーションも取りやすく、自分のこれからを相談しやすい存在だったとも言えます。しかし、それだけではなくコーディネーター自身も様々な機会でのコミュニケーションを取ったり、必要に応じて「学習者の出番をつくる」ことによって地域を再訪問したり、高いコミットメントを生み出すことで、学習者と地域との関係を深めている点が重要だと言えます。

このような東伊豆町での営みやコーディネーターの荒武さんの関わり方を分析し、私たち(天野・皆田)のフィールドワークのコーディネート経験も統合しながら作成したのが、図3-6になります。



図3-6 地域学習におけるコーディネーターの関わり方の概念図

高校の探究学習、大学のフィールドワーク、滞在型のインターンシップやワーキングホリデー等、学習者が地域を訪れ、学びを深める期間中、コーディネーターは地域資源を活かしながら学びのサポートを行い、同時に学習者と地域内での新たな社会関係の創出を促していきます。このように、地域の多様で豊かな関係を、学習者自身は持つことができます。関係を持つには、ただ出会うだけではなく、お話をじっくり伺う、一緒に活動し共に汗を流したり、時には自分たちから企画提案をして意見をもらう、協力してもらう、相談をする等、単なる観光ではできないような関わりを深める工夫が必要となります。ゆえに、地域学習を機会として上手く使いながら、学習者にとって心地よい地域内の関係の創出を生み出すことが重要となります。

大学でのフィールドワークの授業等が終了した後も、学習者がもう一度地域に行きたくなる働きかけをコーディネーターができるかが、地域と教育機関を行き来するような往還を生むコーディネートの見せ所です。例えば、在学中では、学習者から何らかの相談があった際、地域のイベントに誘ったり、あるいは、コーディネーター自身が地域のことで困っていることがあれば、新たな着想を得るために逆に相談したりと、学習者と一体となって地域を盛り上げようとする姿勢が信頼関係を高め、より強い結びつきが生まれると考えられます。また、それは学習者が卒業した後も同様で、継続的な交流を行いながら、例えば、地域に旅行等での来訪時に交流をしたり、地域おこし協力隊のようなインターン等で地域に住み込む際には、暮らしのサポートとして気にかけて、一緒に仕事をする等、フェーズに合わせて適した関わり方をしていくことが重要と言えます。

上述のプロセスを経た場合、学習者が地域に関わりたくなるような意識が醸成されていくのではないかと、という仮説的なモデルを描いていますが、重要なのは、学習者にとって地域が「学習の空間」から「生活の空間」という認識に変わっていくことではないかと思います(図3-7)。時間を経て、地域での様々な経験が深化し、地域との関係性がより醸成されていくことによって、地域への想いが深まっていく、言い換えれば、地域学習をきっかけに関係人口となった後、様々な経験と関わりを通じ、移住しなくても「私にとって、帰る場所」という生活空間的な認識を持ち続けられるような関係をつくるのが、コーディネーターとして技術の見せどころかもしれません。

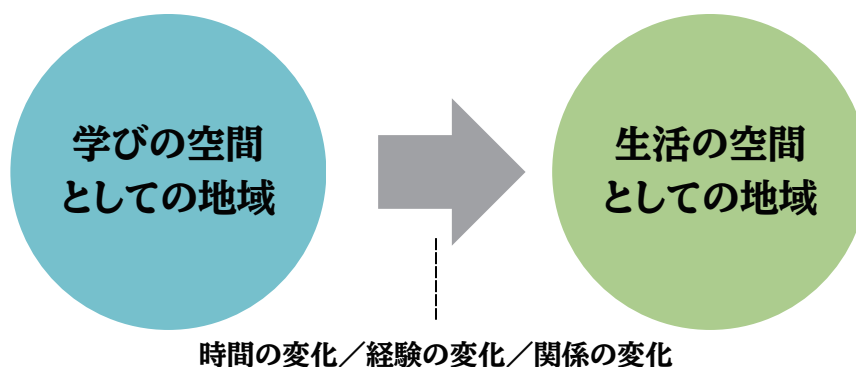


図3-7 学習空間から生活空間への認識変容

なお、補足になりますが、コーディネーターが地域づくりの一人のプレイヤーの立場で、学習者とパートナーとして関わることは、コーディネーター自身のプレイヤーとしての成長に寄与し、それは学習者との関わり方のスキルに影響していきます。荒武さん自身、静岡大学のフィールドワークを受け入れた後に、現在代表を務めるso-anを立ち上げ、宿泊施設の経営を新たに始められています。そのため、フィールドワークで関われる学生との時間も限られてきたため、フィールドワークの1期生と現在では関わり方もフィールドワークの進め方も変更されているそうです。現在は、Bさんにフィールドワークのコーディネートを業務委託し、アドバイザー的な立ち位置から地域学習に関わっています。今後、学生にとってBさんが荒武さんのような存在となっていくと、荒武さん、Bさんの2枚看板によって東伊豆町と学生の関わりの幅がさらに広がっていくかもしれません。

第3章では、静岡大学地域創造学環による東伊豆町のフィールドワークを事例に、学習者とコーディネーターの関わりについて解説してきました。学習者と向き合う際のコーディネーターのスタンス、地域学習中の社会関係の創出、地域学習後の段階に応じた関わり方の変化等、コーディネーターの技術のヒントが見えてきたように思います。

次章ではこれまでの1章、2章、3章を基に、コーディネーターが持つ技術として、「コミュニティマネジメント」に着目し、地域学習の機会を通じて学習者と地域に豊かな変化をもたらす手法について解説したいと思います。

参考文献

- 平岡義和, 2022, 「地域創造学環のフィールドワークー立ち上げ、現状、課題ー」『静岡大学地域創造教育研究第3号』, p11-19
- 皆田潔, 2019, 「【コラム】地域に学ぶー地域創造学環フィールドワークの取り組み」『大学的静岡ガイドーこだわりの歩き方』, 昭和堂, p20

キーワードの解説

空き家改修プロジェクト

芝浦工業大学にて建築系を専攻する学生で構成される、空き家の改修を通じた地域活性化を目指す学生団体。東伊豆町を皮切りに、全国で空き家改修に取り組んでいます。

東海若手起業塾

愛知県に本社を置く大手電機メーカーのブラザー工業株式会社が協賛し、2008年に始まった東海地域において社会課題と向き合う起業家を伴走支援する半年間のプログラム。

まちやど構想

まちを一つの宿として見立て、宿泊場所と地域内の飲食店、浴場、商店等の地域固有の体験ができる地域資源を結びつけながらまちぐるみで地域の価値向上を目指す構想。全国複数地域で展開され、一般社団法人日本まちやど協会も設立されています。

第4章

地域学習におけるコミュニティマネジメント



第4章 地域学習におけるコミュニティマネジメント

第1章では、地域学習の広がりコーディネーターの重要性について触れ、第2章では、地域学習を経験した若者の意識の変化を確認してきました。また、第3章では、東伊豆町での事例から、学習者とコーディネーターの関わりについて具体的な検討を進めてきました。第4章では、本書の目的である、地域学習をきっかけとして地域の活力向上や学習者との関係醸成の方法について解説していきたいと思います。

さて、第3章における事例分析から見てきたのは、学習者が地域学習をきっかけに地域を訪れ、人と出会い、関係が深まっていくプロセスと、それを促すコーディネーターの姿でした。そして、学習者が地域住民や事業者などのステークホルダー(利害関係者)と繋がり、それが連鎖していくことで地域内の認識の変化を起こしていること、継続的な地域との関わりやIターンなどに結びついていること、それがコーディネーターの様々な働きかけや工夫によって生まれていること等、地域内での社会関係の広がり深化によって、これらの変化が生まれていると言えます。では、社会関係を生成、広げ、深めていくには、どうすれば良いのでしょうか？

私たちは、そのスキルの柱は「コミュニティマネジメント」にあるのではないかと現在結論づけています。

1 コミュニティマネジメントとは？

2020年に出版された『コミュニティマネジメントーつながりを生み出す場、プロセス、組織』の著者である坂倉・醍醐・石井は次のようにコミュニティマネジメントについて説明しています。

私たちが考えるコミュニティづくりとは、地域内外の多様な立場の人と人との垣根を超えて出会い、そこから思いもよらない新しい活動の「社会的創発」が次々と生み出される状態をつくること。しかもそうしたアクションが単発で終わるのではなく、持続的・自律的に発展する「生態系」をつくりだすためのマネジメントを指します(坂倉・醍醐・石井 2020:i)

本書の対象とする地域学習に引き寄せるのであれば、**地域学習におけるコミュニティマネジメントとは、地域学習を経験した学習者が地域内外の多様な人と出会い、思いもよらない新たな活動を共に生み出すことに加え、持続的・自律的な地域の生態系をつくりだすためのマネジメント**と言えます。

何度か本書でも使われる「繋がる」は、日常的な行為でもあり、おそらく地域づくりに関わる方であれば、繋げてもらった経験も繋げる経験もありかと思います。コミュニティマネジメントは、この「繋がる」、「繋げる」という行為をより深く分析して技術として捉えています。例えば、坂倉(2010)は、坂倉自身が運営に参画する芝の家の実践の分析から、クラスター状の関係の生成の安心感を指摘しています(図4-1)。生成された繋がりがどのような関係を帯びているのか、それが今後、どのような場面で、どのような変化へと連鎖するのか。地域のコミュニティやシステム(構造)の変化を志向し、関係の生成を促していくことが、地域づくりの技術としてのコミュニティマネジメントなのです。

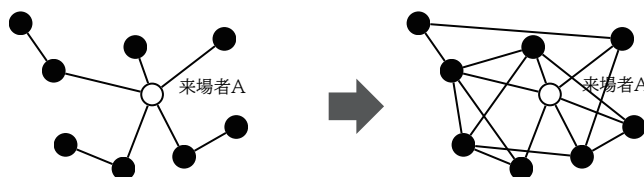


図4-1 放射状の人間関係(左)よりも、クラスター状の関係(右)の方が安心感を感じられる[出典:坂倉(2010)]

2 コミュニティマネジメントを活かした地域づくり

共同研究チームがヒアリングを行った東京都世田谷区の一般社団法人おやまちプロジェクトは、まさにコミュニティマネジメントを活かした地域づくりの先進事例でした。「歩行者天国でゼミをやってみる」という小さなアクションから、繋がりを活かした様々なプロジェクトが生まれ、現在ではまち全体が舞台となった「尾山台まちじゅうラボ化プロジェクト」という新たなプロジェクトも発足し、一人ひとりのウェルビーイングが尊重されるようなまちづくりが進んでいます。また、ゼミの活動等で関わった学生たちが卒業後も定住したり、地域外から通ったりと、第3章で見た継続的な関係が続いています。

本書の執筆者の一人である天野も、^{おおや・おしか}静岡市駿河区において「大谷・小鹿まち育てプロジェクト」というチームを立ち上げ、地域住民や大学生とともに、静岡大学静岡キャンパスのある大谷地区を中心とした、コミュニティマネジメントを活かした地域づくりに取り組んでいます(図4-2、図4-3)。



図4-2 住民や学生との勉強会



図4-3 公民館を使ったイベント

出会い、繋がっていく過程で起きていくことを楽しみながら、新たな地域のビジョンや企画を生み出すことを重視して活動していますが、参加する学生の振り返りレポートからは、

「普段の大学生活では会うことのできない人と会ってお話できることが、このまちづくりプロジェクトで感じた面白さのひとつ」

「このプロジェクトに参加していなければ出会えてなかっただろうな、という人たちと出会って、一緒に活動したりお話をしたりできる」

という生まれた繋がりからの気づきに対する言及が多く見られます。また、

「私だったら地元のこれに対してこう思うなあということと真逆の考えを持つ人もいて、私にとってはそれが新しい発見でとてもワクワクしました」

とさらに自身の内面に向けた振り返りをする学生もあり、地域学習のプロセスに学生たちはいるのだと再認識しました。同時に、一緒に関わる地域住民も大学や学生に対する理解が活動を通じて深まっていき、「そのイベント、公民館を使ってやってみよう」、「小学校に話を通すこともできる」等、学生との関係を契機に新たな行動が生まれ、繋がりが行動変容に連鎖しています(図4-4)。このような連鎖が広がることで、地域のコミュニティやシステムにも影響を与え、まち全体に豊かな変化を実現していくことが期待されます。

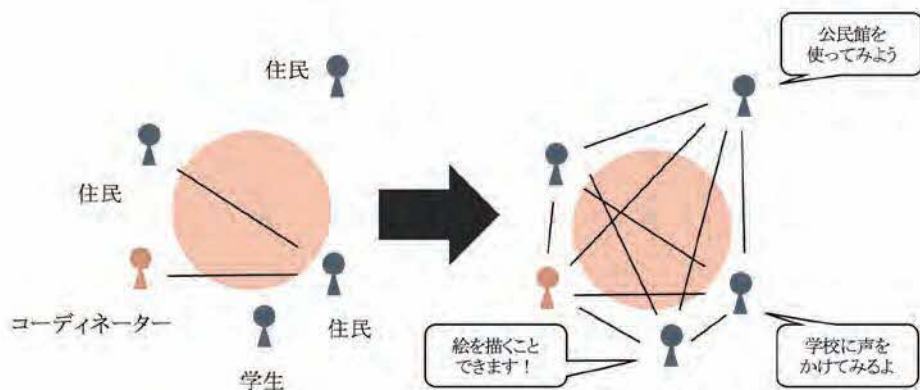


図4-4 繋がりが育まれ、行動変容が生まれていく

3 地域学習におけるコミュニティマネジメントの手法 —「繋ぐ」から「紡ぐ」へ

では、具体的にどのような手法でコミュニティマネジメントを行い、繋がりを生みながら地域づくりを実践するのでしょうか。様々な手法がコミュニティマネジメント論(コミュニティデザイン)では開発・体系化されていますが、本書では地域学習という領域に軸を置き、地域づくり団体の方でもすぐに実践できる手法を5つのステップで解説します(図4-5)。

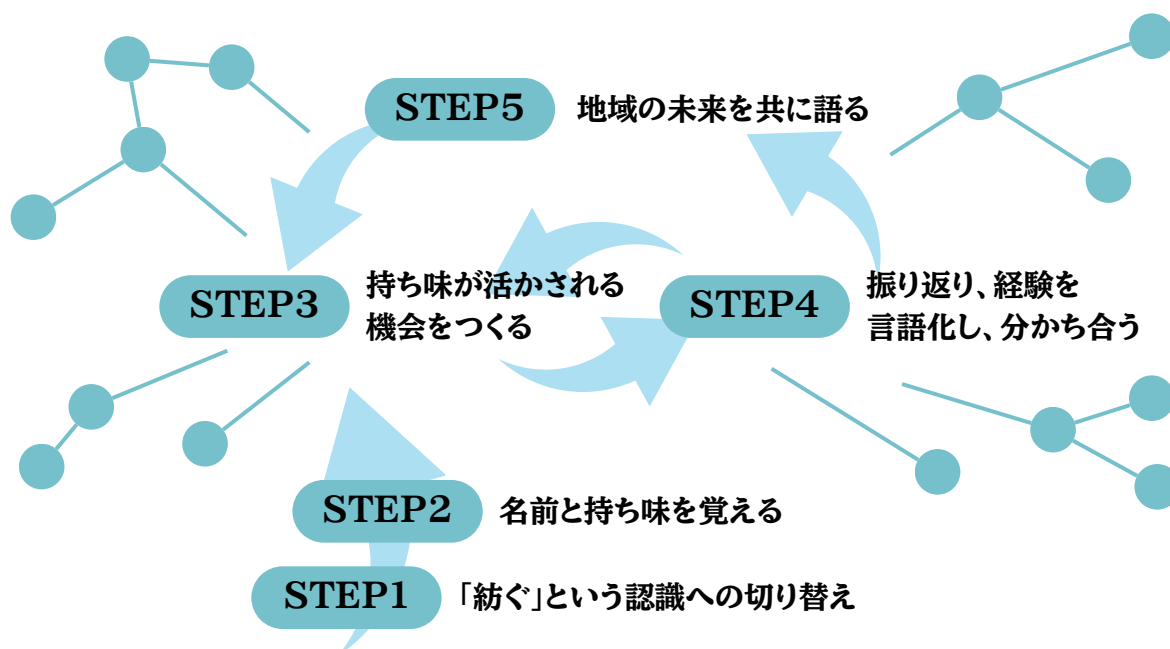


図4-5 地域学習におけるコミュニティマネジメントの手法(5つのステップの概念図)

STEP1 「繋ぐ」という認識から、「紡ぐ」という認識へ変える

ここまで本書では、「繋ぐ」、「関係の生成」という言葉で説明をしてきましたが、これらは、一人ひとり価値観や個性が異なる人間と人間が出会い、コミュニケーションを経て生まれるのが現実です。そのため、コーディネーターの安易な「繋ぐ」、「結合」、「くっつける」という行為では、安心感があり、関わり続けたいと思うような関係にはなりにくいと考えられます。

そこで、「紡ぐ(つむぐ)」という認識に立つことを前提として提案します。紡ぐとは、綿や繭から細い繊維を引き出して、ねじり合わせながら糸にしていく行為のことです。転じて、「言葉を紡ぐ：言葉を繋ぎ合わせながら文章を作成する」といった使われ方をしています。価値観や個性、これまでの人生経験やこれからの展望、私たちは一人ひとりが異なる存在だからこそ、それぞれの持っているものを引き出すようなコミュニケーションを通じて、それぞれの糸を掛け合わせていくような出会いの場をつくるのが、心地よい関係になるのではないかとこれまでの事例や私自身の実践から感じています。

第1ステップとして、コーディネーター自身の認識を変化させることがスタートです。

STEP2 名前と持ち味を覚える

「紡ぐ」を実践するには、コーディネーター自身が、コミュニケーションを通じて学習者や地域のステークホルダー等を理解する必要があります。その際、まずは名前を覚えて、呼ぶときに「〇〇さん」と声をかけられるようになることを、あえて明示したいと思います。というのは、地域学習や地域づくりにおいて、何度か会っている学生に対して「学生さん」や「そのきみ」と呼ぶ方が少なくありません。これでは、より良い関係にはなれません。まずは、相手の名前を覚えて呼びかけることをおすすめします。

次のステップは、持ち味、すなわち、個性や特技、関心があることや好きなことなど、コミュニケーションを重ねる中で理解し、覚えていくことが大切になります。後述しますが、持ち味が発揮される機会を地域づくりや地域学習の活動でつくるさいに、活かされる情報です。何気ない会話の中での発言なども含めて、コミュニケーションを楽しみながら、相手のことを理解し、覚えていけると良いです。

STEP3 持ち味が活かされる機会をつくる

コーディネーターの中で蓄積された学習者や地域のステークホルダーの情報、地域学習におけるフィールドの課題感などを掛け合わせながら、それぞれの本来持っている力が発揮され活動機会をつくるのが次のステップです(図4-6)。地域学習における課題解決学習では、地域の課題解決をミッションとして設定し、学習者がミッション達成を目指して活動を展開していくことが一般的ですが、取り組む学習者の特技、関心やステークホルダーとなる地域住民の個性や価値観等が掛け合わさるようなミッションの設定をすることで、持ち味が発揮される活動機会の創出・発展が可能です。また、様々な課題や資源を抱える地域であれば、学習者一人ひとりに対して、ある程度の適性がある機会を準備することもできます。

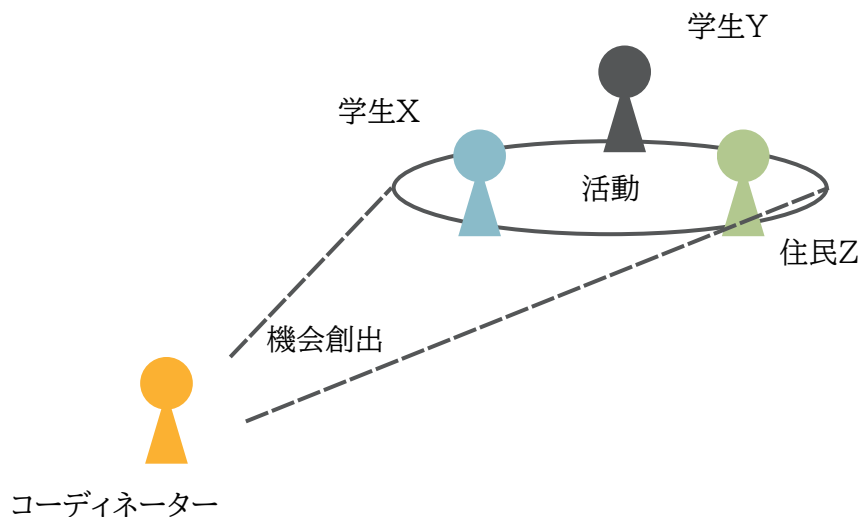


図4-6 持ち味が活かされる機会をつくる

なお、活動を進める中で、学習者が方向性を見失ったり、地域のステークホルダーがどう振る舞えばいいかわからなくなってしまうことが地域学習では少なくありません。そのさい、持ち味を意識した活動機会の設定ができていると、「Xさん、〇〇に今関心があるって言っていたでしょ？調べてみると活動に活かせるかもしれないよ」、「この活動はZさんが困っていらっしゃった課題そのものなので、日頃感じられていることとお話しただくといいですよ」など、地域学習のファシリテートも効果的に行うことができます。

このような活動機会に工夫をすることで、活動が一つの舞台となり、学習者や住民、事業者等の関係が生まれやすくなると考えられます。

STEP4 振り返り、経験を言語化し、分かち合う

地域学習は、地域の課題や資源を活かしながら行うことがほとんどです。そのため、地域学習の成果として、課題解決や資源利活用に焦点が当てられがちですが、学習プロセスの中で経験したこと、学びになったことなどを振り返り、言語化して生まれた気づきも重要な成果となります。さらに、コミュニティマネジメントの立場から、活動を通じた関わり合いを振り返ることになり、地域学習を通じて得られた関係は何か、その関係から自分はどんな経験をし、どんな気づきがあったのかを確かめるプロセスになります。そして、言語化して生まれた気づきを分かち合う時間があることで、お互いの気づきが交換され、学びも関係も豊かになります。

できる限り、毎回の活動の終わりに30分程度「振り返り」の時間を取り、活動に関わるコーディネーター、学習者、地域のステークホルダーも全員、一人ずつ振り返り、経験を言語化して共有できることが望ましいです。

「今日の活動を通じて、最も印象的な経験と気づきはなんですか？」
「今日の気づきから、これからどんなことをしてみたいですか？」

など、一人2～3分程度でお話できるような問いを設定して、気づきを分かち合っていただけると良いです。

STEP5 地域の未来(ビジョン)を共に語る

出会い、活動を続け、振り返るプロセスを繰り返していくと、活動が活性化していきながら、学習者や地域のステークホルダーの様々な行動や構想(アイデア)が生まれてきます。そして、当初の想定を超えたことが起きていきます。例えば、子ども食堂として立ち上げた活動が地域全体に浸透し、子どもだけではなく高齢者の方々が参画し始め、お話を伺うと、高齢者の方の望まない孤独・孤立の実情が見えてくるという事例がありますが、子ども食堂が「子どもたちのための場所」という当初の想定から、「孤独・孤立状態の高齢者にとっての社会参加の場所」という価値の発見だとも言えます。

このような地域学習を通じて生まれた価値や新たな出会いを、地域の未来の変化へと結びつけていくことは、地域づくりにおいて重要なタイミングであり、ここで次の地域の未来(ビジョン)を描けると良いでしょう。その際、地域学習に関わる方々と共に地域の未来を語ること、特にそれぞれを主語にして未来を語ることをお勧めします。

ビジョンとは未来の具体的なシーンの集合体です。「私は、このまちが〇〇になると良いと思う」、「△△にしていきたい」というそれぞれから未来を語るプロセスは、自分自身が登場人物となったシーンを分かち合い、集合させながらビジョンへと編集する時間でもあります。学習者や住民などの肩書きを取り払って、地域で出会い活動してきた対等な立場から、未来の地域の姿を紡いでいくことで、活動の先に未来を実現する変化を描き、創り出すエネルギーと具体的な行動に変わることが期待されます。ぜひ、タイミングをみて「未来を語る時間」もつくってみてください。

以上、「紡ぐ」をキーワードにしながら地域学習のコミュニティマネジメントを解説しました。抽象的でわかりづらい点も多いかもしれませんが、繋がりを活かした活動は想定がしづらいかもしれませんが、大切なことは、「まずやってみること」と「修正していくこと」です。正解がない社会で地域づくりを行うのですから、想定外なことが起きるはずです。むしろ、想定外の発生をポジティブに捉え、地域の実情に合わせたり、出会った方々の持ち味を引き出しながら、修正をしながら活動・地域を紡いでいくアプローチが有効と考えます。

それぞれの地域学習の現場から、コーディネーターによるコミュニティマネジメントを通じて豊かなつながりと変化が生まれ、地域が変わっていくことを願っています。

参考文献

- 坂倉杏介・醍醐孝典・石井大一郎, 2020, 『コミュニティマネジメント—つながりを生み出す場、プロセス、組織』中央経済社
- 坂倉杏介, 2010, 「地域の居場所からのコミュニティづくり--芝の家の「中間的」で「小さい」グループ生成を事例に」『慶應義塾大学日吉紀要 社会科学』21, p63-78

キーワードの解説

一般社団法人おやまちプロジェクト

東京都世田谷区尾山台駅周辺地域にて、商店街、小中学校・大学、住民が垣根を超えて集まり、様々な活動が生まれているコミュニティ。

ウェルビーイング

人々が身体的な健康状態に加えて、精神的な健康や幸福感に満足している状態を指します。具体的には、健康であること、ストレスが少ないこと、自己実現や生活の質の向上が含まれます。

大谷・小鹿まち育てプロジェクト

静岡市駿河区大谷・小鹿地域にて、大学生が中心となって発足したプロジェクト。多様な出会いと交流を通じ、地域住民や関係人口が自分たちでまちを育む活動を進めています。

おわりに

本研究は、アカデミックの世界よりも、地域の現場で、住民や事業者の方々と汗水を流しながら活動する時間の方が長い私たちの、「帰ってきたくなる地域とはなんだろうか?」という問いからスタートしました。地域側からすれば、学生時代活動していた人材が、関わり続けてくれたり、再び戻ってきてくれることほど、嬉しいことはありません。ゆえに、地域学習の機会、人口減少や少子高齢化等が進む地方都市や集落にとっては、地域が変わる重要な契機となると思いますし、地域側から教育機関や学習者に対して、様々な働きかけが行われています。

しかし、生まれた繋がりが一人ひとりの自由を制限したり、尊厳を損なうものになってはなりません。であれば、どのように私たちは、出会い、経験し、学習し、関わっていくと良いのか…関わり合いを生むコーディネートの方法、技術を生み出すことが、教育機関と地域の間を行き来する私たちの使命だろうと感じていました。

本書がその使命を十分に達成できたかという点においては、まだまだ不十分な点も多いと思います。当初から一貫した方向性を持っていたというより、調査研究と議論を重ねる中で紆余曲折しながら、地域学習におけるコミュニティマネジメントが、地域と若者を紡ぐコーディネートの可能性を広げていくことにたどり着いたような実感を持っています。同時に、地域学習から地域を変えるための方法としての手応えを感じています。今後は、より方法・技術としての研究を重ねていながら、一人ひとりの学びを豊かにし、地域を変革していくようなコーディネートを探究したいと思います。

本研究において、アンケート調査にご協力くださった皆様、事例研究にご協力くださった、合同会社so-anの荒武優希様とインタビューのお二人、一般社団法人おやまちプロジェクトの高野雄太様に御礼申し上げます。また、本書ではご紹介ができませんでしたが、一般社団法人草薙カルテッド共同代表山本洋平様にも地域と学生が関わる視点について重要な示唆をいただきました、併せて御礼申し上げます。

本書が、一人でも多くの方の学びを豊かにし、一つでも多くの地域の変革を支える機会になれば、幸いです。

2025年3月

皆田潔・天野浩史

著者

皆田 潔(みなた・きよし)

島根県中山間地域研究センター地域研究科専門研究員
専門:地域計画学、コミュニティ活動、資源循環、環境政策

天野 浩史(あまの・ひろふみ)

静岡大学サステナビリティセンター特任准教授、特定非営利活動法人ESUNE代表理事
専門:臨床社会学、社会デザイン論、コミュニティデザイン論

地域の学びを活かしたコミュニティマネジメント 若者と地域を紡ぐコーディネート

発行日 2025年3月

発行 島根県中山間地域研究センター

〒690-3405 島根県飯石郡飯南町上来島1207 TEL :0854-76-3836

編集 島根県中山間地域研究センター・NPO法人ESUNE

著者 皆田潔・天野浩史

表紙・挿絵デザイン 梅田留奈

印刷 有限会社木次印刷

